イソ公のテケテケ伝！

文：杉山かっつう

POWERED BY 文化屋楽器店

その１　～初めてのギャラ　ナント３００円～パート１

１９７４年（昭和４９年）６月下旬のとある日、私は神奈川県平塚市にある東海大学湘南校舎近くのイソ公の下宿に居た。
４畳半一間、便所、風呂、炊事場共同の学生１０数人が暮らす安下宿である。その後下宿人のタバコの不始末で全焼し、イソ公も焼け出されるのだがそれは又別の話。
　その日、いつもの通り授業を適当に切り上げイソ公の部屋で寺内御大のギターテク解説が始まっていた。
講師はイソ公、生徒はＴＥＲＲＹＳベースの石田定正とサイドギターの私かっつう。
３人とも静岡の高校の同級で今春、東海大政経学部政治学科に揃って入学したばかりである。
　数十枚ある寺内御大のレコードを回しながら、
「ここだよ、ここ。Ａｍからｇに移るだろ、このアドリブのここで半音ずらしてんだよ。ノーキーはエコー使ってごまかしてるけど、寺内は使ってないよ、三連符で四小節早弾きだよ。すげーよな、わかるか？かっつう」
「…。石田、わかる？」
「音はずしたんじゃないの？単なるミスだったりして、ハハハ」
「お前らホントにバカだな」
　そのとき、天野高広が部屋に飛び込んできた。こいつも同じ高校から今春文学部に入学したドラム担当である。
「おい喜べ、清水のビヤガーデンの仕事とったぞ。ウチのテープ持ってったらさ、８月の１ヶ月、毎晩やってくれって。すげーだろ、バンドやってカネもらえんだぜ。我等ＴＥＲＲＹＳもいよいよプロだぜ」
「ホントか！７月は前期試験が２３日に終わるな。よーし、俺の実家で２５日から合宿だ！」
　イソ公も興奮していた。

　当時、イソ公の実家は静岡県清水市袖師（現静岡市）にあった。現在のジャンボエンチョー清水店のはす向かい。シェル石油のターミナ

ルが清水港に隣接してあり、そこの所長が彼のオヤジである。目の前は港、広い敷地の中にでっかいタンクや倉庫が立ち並び、いくらデッカイ音出しても迷惑するのは港の魚だけ。潮風を避けて空いてる倉庫を使えば絶好の練習環境である。

その敷地内にある社宅での合宿にはイソ公のオヤジさん、おふくろさんには大変お世話になった。オヤジさんは当ホームページ「イソちゃんのワガママ日記」で本人が回想しているので参考にしていただきたい。

無口なオヤジさんよりおふくろさんの印象が特に強い。

これが面白いかあちゃんで私の「京女」のイメージを見事にくつがえしてくれた。今のイソ公のＭＣはこの母親譲りである事は間違えの無い事実であろう。（このホームページ「ギターの杜」のどこかにイソ公と母上のツーショットが載っているのでご覧あれ）

かくして「五十棲淑朗＆ＴＥＲＲＹＳ」のプロとしての活動が始まろうとしていたのである。

オマケ

当時のイソ公語録１

「天才は９９％の努力と１％のひらめき」とか「努力に勝る天才無し」とか、こりゃうそだね。

かっつうがいくら努力したって１００ｍ１０秒で走れるようにはなれないだろ。無理だって。

学校の先生も子供によくこんな無責任なこと教えるよな。

努力すりゃ何でも叶うってあるわけ無いじゃん。

要は自分の才能を見極める事。人間、生まれ持っての才能ってあるじゃん。

えっ？、かっつうの音楽の才能？はっきり言って無いね。

お前がＴＥＲＲＹＳにいるのは「枯れ木も山の賑わい」ってか。

その２　～初めてのギャラ　ナント３００円～パート２

前期試験も終わり、いよいよビヤガーデン出演を控えてイソ公の実家での合宿が始まった。
ここで改めて第１期ＴＥＲＲＹＳのメンバーを紹介しておこう。

リードギター：五十棲淑朗
ベースギター：石田定正
ドラムス：天野高広
そしてサイドギター：私、かっつう

合宿も終盤にさしかかった頃、天野が言った。
「なあイソ公、さっき３人で話したんだけど、やっぱビヤガーデン出るにはそろいのユニフォームが必要だよな、ステージ衣装」
「ばーか、そんな事よりお前ら昨日やった曲、暗譜したか？カッコなんかどうでもいいんだよ。しっかり練習しろよ」
「だめだね。揃いのユニフォーム着てビシッて決まれば上手く聞こえるもんだよ。大勢のお客がカネ出して来るんだぜ。イソ公はまだプロの自覚が出来てないね」
「お前らはプロとしての実力が無いだろうが」
「実力は後からついて来るってね。ステージで映えるのはやっぱり真っ赤とかショッキングピンクとか」
「やだよ、赤とかピンクとかって女の色じゃん。俺は絶対やだね」
ここで隣で聞いていたイソ公の母上が口を挟んだ。
「洋服買うなら隣町の興津商店街の○△洋品店がいいよ。この間ご主人が７５で死んじゃって、今閉店セールやってるから安いよ。このスカート昨日買って来ちゃった。似合う？」
「か～ちゃん、俺らプロだよ、そんなダサい洋品店なんかで買うわけねーじゃん。デパートだよ、デパート。か～ちゃんもプロの親として自覚しろよ」
イソ公もいつの間にかその気になっている。
結局、清水の長崎屋で揃いのピンクのジーンズとＴシャツを買った。

（長崎屋は小売の業態はスーパーなのだが、当時の我々は一流デパートだと思い込んでいたのだ）

いよいよプロデビューを翌日に控えた７月３１日、我々は初めてビヤガーデンを訪ねた。
支配人のミルノ氏が上機嫌で迎えてくれた。
イソ公の家から３キロ程離れたこのビヤガーデンは「ニューポート」といい、清水市新港町にあった。現在のエスパルスドリームプラザのすぐ近くで今はカナサシ会館と名が変わっている。
６階建てのビルの１階がナイトクラブ、２階が宴会場、３～６階がホテルの客室、そして屋上がビヤガーデンである。

「いやぁ、待ってたよ。ウチが生バンド入れるの初めてでネ。勝負かけてんだよ。で、早速明日から５日間は『サマーＸＭＡＳ　ＧＯＧＯパーティー』と題してね、東京からゴーゴーガール呼んだから。君等の演奏でガンガン踊ってもらうからさ。君等もガンガン頼むよ」
「はあ」
「ほら、チラシも作ってね、明日の朝刊に入れるからね。前売りも調子いいんだよ」
考えてみれば、この支配人、ウチのテープ聞いただけで生演奏は一度も聞いていない。会うのすらこの日が初めてなのである。
ＴＥＲＲＹＳ一同、唖然としていた。

結局、日曜を除く毎晩、５時３０分から１時間おきに３０分ステージを４回実施。宿泊の部屋と３食を用意する事で合意した。
「そうそう、君たちの中で運転免許持ってるのいるかな？えっ、天野君ね、じゃあ君ね、毎晩ナイトクラブのホステスさん３、４人をを自宅まで送ってくれるかな、会社の車で。１２時に店がハネるからその後で。深夜手当ても含めて１回３千円で。いいだろ」
もちろん天野は快諾した。
「あの～、支配人さん、ところで僕たちのギャラは…」
「ああ、さすがはリーダーだね、五十棲君、一番大事なことだよね。君たちには１ステージ３００円でお願いするよ。１日４回で１２００

円。以上」
「いっ、以上って、待ってくださいよ。ホステス送ってって3千円でしょ。割が合わないんじゃ…」
「君たちネエ、ビヤガーデンってそんなに儲かんないのよ。大ジョッキが４５０円でしょ、腹膨れるから5杯も6杯も飲めないし。クラブはボトル1本ン～千円でしょ、ピーナッツちょっと皿に盛っただけで千円だよ。ウチは独立採算制でね」
「といっても…」

メンバーの誰一人としてギャラの相場を知らなかった。イソ公の完敗である。
「いいか、大学生のバイトが時給３００円のご時世に、バンドやったら３０分で３００円。倍も稼げんだぜ」
イソ公の声が虚しく響いた。
隣で唯一天野だけがほくそえんでいたのを3人は見逃さなかったのであった。

その３　～おっぱいプリンプリンのゴーゴーガール～

１９７４年８月１日（木曜日）、朝からうだるような真夏の日差しが清水の町を照らしていた。
いよいよ「五十棲淑朗＆ＴＥＲＲＹＳ」プロデビューの日である。
…っとまあ仰々しく書き始めたものの、今思えば所詮は学生のアルバイトなのだ。
「ナント大げさな…」とお思いの読者も多いことだろう。
しかし、である。１１歳で寺内タケシに衝撃を受けてエレキを始め、１６歳でバンド結成、人前で弾きたく弾きたくててしょうがなかった五十棲淑朗とその仲間が、今日からおカネを貰って演奏するのだ。
たとえそれが１ステージ３００円であっても、１８歳の我々にはすごい出来事だったのである。
そこのところをご理解のうえ、この連載をお読みいただくと幸いである。

さて、本題に入ろう。
合宿でお世話になったイソ公の御両親へのお礼もそこそこに、９時にはビヤガーデンに入った。
既にビルの入り口には「サマーＸＭＡＳ　ＧＯＧＯパーティ」の大看板が掲げられ、あちこちで飾り付け作業が行われていた。
我々も楽器を屋上にセッティングし、早速音合わせ。合宿中の薄暗い倉庫の中から一転、灼熱の太陽と青空の下での大音量はやっぱり気持ちがいい。
エレキバンドをやった者だけが味わえる至福のときである。

昼過ぎにこの章の主役、ゴーゴーガール２人がやってきた。
アイリーン　１９歳、リカ　１７歳と紹介されたが、どう見ても５歳はサバ読んでる。
長ーい付けまつげとド派手な厚化粧。
「瞬きするたびハエが落ちる」とはベースの石田の弁。
顔はと言うと…フェミニストの私の口からはとても言えないので、機

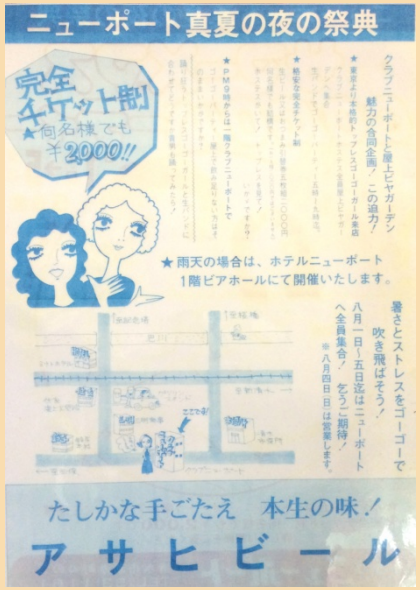
会があったら師範代様に聞いて頂きたい。
きっと的確な表現で形容されるはずである。
実は彼女たち、トップレスゴーゴーガールで、聞いてはいたものの、
我々はその意味を誰も知らなかった、うぶな１８歳。

いよいよ第１回目のステージ。お客は超満員。「テリーのテーマ」で始まると客席後方からブラジャーにミニスカート姿の２人が登場。
ステージ前の特設お立ち台に上がり、ベンチャーズをメドレーで３～４曲流している途中でおもむろにブラとスカートを脱いだ。
お客のボルテージが一気に高まったその時、事件は起きた。
彼女たちが足元に脱ぎ捨てたブラジャーを拾いにスケベな酔っ払いどもが我先にと押し寄せたのである。
ドサクサ紛れに彼女らの胸をつかんだり、パンティに手を突っ込んだりとＴＥＲＲＹＳの演奏をよそに目の前は大混乱。
支配人が血相変えてすっ飛んできた。
「踊り子さんには手を触れないで～！！」ここはストリップ小屋か？
２回目のステージからはイソ公が
「え～、くれぐれも商品にはお手を出さないようにお願いします」と言ってからジャーンと曲に入るという、何ともマヌケなオープニングになり、
問題の脱ぐところでは、ブラとスカートはＴＥＲＲＹＳのステージに投げ、サイドギターの私がアンプの後ろに隠すことになった。
しっかり投げてくれりゃいいものを、屋上に吹く海風にも流され、あっちこっちに飛ばすもんだから始末が悪い。
演奏中のメンバーの前をギター抱えたままブラジャー拾って歩く姿は、何とも情けない。今思い出してもゾッとする。
「おーい、そこのスケベ小僧、ブラジャー集めてないでしっかりギター弾け！わはは…」
野次飛ばしたこのオヤジの顔は今でも忘れない。
まあ、ルックスはともかく、女の子が目の前でおっぱいプリンプリンで踊ってる。ステージ上の童貞４人組（たぶん）には何とも刺激的であり、嬉しかった。

この２人、ステージ以外でもお騒がせのお姉ちゃんたちだった。ナイトクラブのバーテン２人に深夜ドライブをねだって男達を散々振り回したまでは良かったが、最後は男達が狙いどおりラブホテルへ。慌てて逃げ出し、我々の部屋へ駆け込んだために「お前ら、この女らと出来てんのか！」とバーテンに凄まれたり、いつも鎮痛剤を飲んでラリッていたアイリーンがクスリ飲みすぎて意識を失い、救急車を呼ぶ始末。

たった５日間だったが、今では１番の思い出である。その後、どんな人生を送っているのかねえ。

しかしこれから半年後、この２人がＴＥＲＲＹＳのステップアップに尽力してくれる事になろうとは、さすがのイソ公も知る由もなかった。それは又別の機会に…。



その４　～♪ソソソクラテスもプラトンもみーんな悩んで大きくなった♪～

８月６日朝、東京のプロダクションからマネージャーがアイリーンとリカを迎えに来た。
「いろいろ迷惑かけたね、でもとっても楽しかった。忘れないよ、テリーズのこと」
「小さな日記、演奏してくれてありがとう。好きなんだ、あの歌。嬉しかった。あんたち、とっても上手いよ。また一緒にやりたいよ」
「おう、またな。もうクスリなんかやるんじゃねーぞ。体、大事にしろよ」
「うん…」２人とも目をうるませている。
タクシーに乗り込む２人の姿が、とっても小さくて、帰るというより連れて行かれるように見えた。
今度はどこへ行くんだろう。言われるままに全国を回って、裸になる事を拒否する事さえ許されず、男どものスケベな視線を浴びながら踊るんだろう。
バーテンをそそのかして夜どおし振り回したんだって、そんな男たちへのささやかな、そして彼女らが出来る最大の抵抗なんだ。
クスリ飲んでラリッてなきゃやってられないんだろうな。
いろんな人がいて、それぞれの人生があって。
もしかしたら自分の思いどおりにならない人生って多いんだろうか。
大学に行かせてもらって、好き勝手にギター弾いてる自分たちの事を、彼女たちはどう見てたんだろう。
街並みに消えていくタクシーを見送りながら、世間知らずの１８歳の４人はそれぞれに、これからの長いであろう人生にチョッピリ疑問を感じていた。
…っとまあ、今回はしんみりと、かつ格調高くスタートした「イソ公のテケテケ伝」その４。
しかし、この格調を維持するのは難しい。それがＴＥＲＲＹＳ。
ベースの石田がポツリと言った。
「さよならだけが人生か…う～ん」

「ば～か、似合わねーんだよ。お前の場合、特に！」
「さっ、屋上行くぞ。今日からゴーゴー無いから曲の編成変えるからな」
「え～ッ、練習かよ、イソ公。俺、ホステス送ってって、ロクに寝てねーんだぜ。寝かしてくれよ」
「なんだと、天野。お前、勝手に３千円稼いでんだろ、知ったこっちゃねーよ。なっ、かっつう」
「そうそう、俺たちにゃぁ全く関係ないもんねーだっ。ねっ、リーダー、今日は目いっぱい練習しましょうよ。キャラバンのドラムソロ、３０分位やって貰いましょ！」
「賛成！…ヘン。あっかんべ～」

イベントの終わったビヤガーデンでＴＥＲＲＹＳは色々なチャレンジをした。
ベンチャーズのまねをして、ベースをドラムのスティックで叩いたり、オーケストラのカラオケでの「輝く星座～レット ザ サンシャイン イン」や「慕情」をやったり。
お客のリクエストには、イソ公が「おい、Ｄｍ の循環コードな」と目配せしてそれなりにこなした。
即興できないときは、
「お客さん、いい曲知ってますねえ、次のステージでやるからあと３０分、ゆっくり飲んでてよ」
「なーんだ、出来ねーんだろ」
「失礼だな～。出来るけどね、今はやりたくないの。その曲、俺嫌いだから」
控えに戻ってイソ公がコード進行をササッと書き上げ、「よし、頭は Ｃ で Ｅｍ から Ｆ へ流してベローン。サビは２度繰り返し、エンディングはセブンスにして、こんなんで」
そして次のステージ。
「あれ、お客さんまだ居たの。よく飲むねえ。まいったな、まだ聞きたい？あの曲。しょうがないねェ、ワン、ツー、せえのお」ジャ～ンまあ、こんな感じ。今よりずっとおとなしいイソ公のＭＣ。
演歌、軍歌からフォーク、ロックまで、ステージ毎に変わる客層に

合わせてその場で選曲するイソ公と、それにあわてて合わせるメンバーの面々。
この１ヶ月でＴＥＲＲＹＳはレパートリーも、ステージ進行も、まだまだ未熟ながら大きく成長したといえる。

ある夜、お客が声を掛けてきた。
９月の毎週金曜日、スナックで一緒にやらないかと言う。
ジャズバンドやってた深沢氏（フルート）、市川氏（ボーカル）と組めばステージの枠を取れるというのだ。
４０分ステージ３本。ギャラは一晩ひとり、ナント驚きの４千円で決まった。
この静鉄新清水駅前のスナック「メイク」のステージでは新たにジャズのフレーズも吸収することができたのである。

いろんな人と出会って、いろんな事があって、ＴＥＲＲＹＳの１８歳の夏はあっという間に通り過ぎていった。
大学へ戻る電車の中で石田がボソッと歌いだした。
「ニッニッニーチェもサルトルも…」
「またかよ。お前、頭、大丈夫か？」
「勝手に悩んでろ！」

余談ですが…
運転免許を持ってるだけで毎晩３千円も稼ぎ、メンバーから総スカンくらったドラムの天野高広。
見事なぐらい運転がヘタクソで、ドブに脱輪したり電柱にぶつけたりで１ヶ月後のルーチェはボコボコ。
３千円×２７日＝８万１千円から修理代７万８千円を引かれて、結局３千円の収益のみ。
一同、溜飲を下げた。「ざまーみろ！」

その５　～チョ～過酷！ブルージーンズのボーヤ～

１９７４年（昭和４９年）１０月、ＴＥＲＲＹＳの４人はまた平常の大学生活に戻っていた。
イソ公の部屋に屯してはＴＢＪのレコードを聴いたり、エレキの練習したり。
いつ勉強してたかは全く記憶に無い。ただ、いつも腹減らしてた事だけは記憶にある。
「あ～ぁ、腹減った。なあ、かっつう、映画の中じゃあエレキバンドのリーダーは『田能久』の御曹司だったよなあ」
「そうだよ、石田。青大将も二瓶正也も、すき焼きバンバン食ってたよ。俺、エレキやったらすき焼き食えるもんだと思ってた」
「悪かったな。俺のオヤジが有島一郎じゃなくて、石油屋の社員で。」
「いや、そんな事思ってないよ。映画の世界と現実は違うもんなッ、かっつう」
「そうそう、もしもイソ公がすき焼き屋のお坊ちゃんだったとしてもさ、俺ら『よっ、若大将！』なんて呼びたくねーもん、オメーの事」
「うん。でも、イソ公が『寺内タカシ』だったら、蕎麦は食えたよな。『出前の途中だけど、カツ丼食べて』なんてね。ははは、は？…冗談だぜ、イソ公」
「…」
イソ公が最近元気が無い。そう。この年の１０月１４日、あの長嶋茂雄が現役を引退したのだ。
程度の低いやりとりはさておき、次第にイソ公の人間性を暴いていくこれからのテケテケ伝。

当時、寺内タケシとブルージーンズは小田急向ヶ丘ファミリーランドで月例屋外コンサートをやっていた。
我らＴＥＲＲＹＳも毎回足を運んでいて、いつしかボーヤ（バンドボーイ）たちには顔が売れていた。
搬送トラックからステージへせっせと機材を運んでいるボーヤたちを興味深く見ていると、リーダー格の男から声を掛けられた。

「君ら、よく来てるなあ。社長（寺内タケシ）のファンか？」
「ええ、大ファンです」
「へー。じゃあ、やってみるか？楽器運び」
「え！いいんですか。やります、やります。手伝いますよ」
　ＴＢＪの楽器を触らせてもらえるだけで、大感激の４人。早速トラックまで走っていった。
　とにかく、デカイ。当時のスピーカーボックスは高さが１６０Ｃｍ位はあっただろうか。それにアンプやらエフェクターやらの機材がジュラルミンケースに入ってわんさかある。
「どれも精密機械だからな。充分注意してくれよ」
ボーヤの連中はケース２個持ってステージに向かって足早に運んでいく。
先ずイソ公がアンプケースに手を掛けグッと持ち上げた。
「むむ…重てー。冗談じゃないぜ、こんなもん２個も持って歩けるかよ」
１個を両手で持ち上げ、よたよたと歩き出した。
「バカヤロー！。そんなもん１個ずつなんかチマチマ運んでんじゃないよ」
リーダーの罵声が飛んだ。
「何言ってんですか。僕は仕事が好きだから人の倍、往復したいんです。ボーヤの連中はこの仕事、嫌いなんでしょ？」
（まったくこのイソ公という男、素直に「わかりました。がんばります」って言えないのかねぇ、昔っからこういう男だ）
「ぷっ、イソ公怒られてやんの。ざまーみろ。」
「次、天野とかっつう。スピーカー運びます」
　スピーカーなら大きすぎて一人で運べとは言われないし、何といってもキャスターが付いている。一番楽チンだと考えたこのふたり。浅はかだった。
「バカヤロー！。キャスターはステージ上で向きの調整に使うんだ。転がしてんじゃねえ。精密機械だって言っただろうが！」
「え？あっ、はい！わかりました。すいません」
　素直だが読みの浅い天野と私。
　２パターンあるこの男たちの３０年後はというと…

ご承知のとおり、イソ公は実の子供にさえ何の仕事やってるか説明できない情けない親父（当ホームページ「イソちゃんのワガママ日記」６月２２日号参照）のクセしやがって、文化屋楽器店の社長、そして寺内タケシの師範代。

一方、サラリーマンになった天野と私。素直に黙々と仕事やって、やっと勝ち得た中間管理職の座に必死にしがみついてる、どこにでもいる中年オヤジ。

世の中間違っとるよ。この男、絶対に年金未払いだから、きっと。チクッたろか！

とにかく、ボーヤは過酷である。

ステージ前はＴＢＪに近づきたい一心で、毎回ボーヤの手伝いをしていたが、ステージ後は観客に紛れて逃げるように帰ろうとする４人。いつも見つかって連れ戻されたけどね。

そのうちにブルージーンズのメンバーたちとも親しくしてもらうようになっていった。

「そうだ、お前たち静岡出身だよな。今度、沼津でラジオの公開生番組があるから来いよ」

「えっ、ブルージーンズが沼津へ来るんですか？絶対行きます」

次回は、我等ＴＥＲＲＹＳとブルージーンズが手を組んで生放送中にいたずらを展開する

～生放送をぶっ飛ばせ～　　お楽しみに。

その６　今回は「遊び心」がテーマ。

　静岡県沼津市の沼津駅南口前に富士急百貨店がある。
当時、その最上階にコミュニティスペースがあり、大きな林檎の木が中央に鎮座ましていたのだが、これを「アップルプラザ」といい、毎週土曜日には静岡放送ＳＢＳラジオの公開生放送「アップルプラザからこんにちは」をやっていた。
ここに、１０月のある日「寺内タケシとブルージーンズ」がやってきた。
　当時のブルージーンズのメンバーは、
２番ギター　石井イワオ、サイドギター　石井カオル、ベース　新庄ハジメ、キーボード　桐生和史、ドラムス　山本進一、ボーカル　深沢ジョーの面々。
　ボーヤの体験からメンバーにも顔を覚えてもらった我等ＴＥＲＲＹＳ、特にベースの新庄さんにはとても可愛がってもらったので、いつかの機会に新庄さん特集をやるつもりですが…。
　今日の生放送の内容は、ＴＢＪによる歌謡曲のイントロ当てクイズ。いつものようにボーヤの手伝いをしていると新庄さんがやってきた。
「新庄さん。イントロ当てクイズの曲、教えてくださいよ。すぐ出て歌いますから」
「この企画って、お客が遠慮しちゃって出てこないと白けるんだよ、生放送の場合、特に。いいよ、やる曲はなあ、ヒソヒソヒソ…」

　楽器も運び終え、やっと自由の身となったＴＥＲＲＹＳ。
「クイズの曲、わかったぜ。最初は『くちなしの花』で『ふたりでお酒を』と…」
「かっつう、よくやった。じゃあ俺、『くちなしの花』やるから」
「待てよ石田、それ、俺だよ、俺に歌わせてくれよ」
その時、イソ公の目が“キラリ”と光った。
　こいつの目が“キラリ”と光る時にいいことは無い。イソ公の邪悪な心に棲みついている悪魔が目覚めた瞬間である。この会場の中に、もうすぐ被害者となる人がいる。アーメン。

「お前ら、チョット待てよ。俺にいい考えがある。新庄さん、どこに居る？」
小走りに新庄さんを探し出し、耳打ちしている。
「新庄さん、あのね、ヒ素ヒ素ヒ素ヒ素…」
ほらねっ、イソ公のヒソヒソ話は猛毒なのだ。
「そうか、面白いな。よし、メンバーに根回ししとくから」

いよいよ本番オンエアである。他人を装い、あえてばらばらに座ったＴＥＲＲＹＳの４人。
ＳＢＳラジオのかわいい新人女子アナがＴＢＪを紹介して、番組は始まった。
「では、イントロ当て第１問はこの曲で～す。ブルージーンズの皆さん、どうぞ！」
新庄さんがニコッと合図してジャーン。先ず石田がマイクの前に飛び出した。
「♪真っ赤な花は　太陽の花さ…」
１コーラス歌った石田がマイクの前でニコニコしてる。困ったのは新人女子アナ。
「あ…ありがとうございます。あなたのお名前と、えー１曲目はくちなしの花…じゃないですよね？」
「ハイ、静岡から来た石田です。えーと曲は寺内タケシとバニーズの太陽の花です」
「は？バニーズ？、えっ、あっ、はい正解です…か？寺内タケシとバニージーンズ？？のくちなし…太陽の花でした？？。ありがとうございました？？？？」
かわいそうな女子アナ。
「では、次の曲。どうぞ」
今度はイソ公が飛び出し、あのダミ声で歌いだした。
「♪あのき～しゃに～乗ろう～あのき～しゃに～乗れば～」
「？？はい、ありがとうございます。さあ、この曲名は？」
「清水のイソ棲です。曲は、寺内タケシとブルージーンズの明日に行く汽車です」
「はい、清水のヒ素棲さん。珍しいお名前ですね、ヒ素棲さん。そう

ですよね、ブルージーンズですよね。はい、ブルージーンズが正解です？？？？」
ステージ上で新庄さんが必死に笑いを噛み殺してる。
３曲目は天野が出ていった。
「♪夕空でぇ～燃えていたぁ～…寺内タケシとバニーズの東京のサンセットです」
「えっ、バ、バニーズ…ですか？、せ、正解？＃％＆＊！＜？？？？？？」
寺内御大が素知らぬ顔してうん、うんと大きく頷いている。
ＢＪのメンバー全員、下向いて肩を小刻みに震わせていた。クッ、クッ、クッ。
こんな調子で、全５曲を我等ＴＥＲＲＹＳが順番に歌い、このコーナーは成功裡？に終わった。

番組終了後、キーボードの桐生和史さんが声を掛けてくれた。
「お前たち、面白い事やってくれたなあ。そうだ。平塚に住んでんだって？来月の平塚のコンサート、前座でステージに立たしてやろうか？マネージャーに言っとくから」
「ええっ、やったー！！！」
暫くしてマネージャー氏が苦虫を潰したような怖い顔してやって来た。
この日のイソ公悪魔の餌食は、かわいい新人女子アナとこのマネージャーだったようだ。
「ああ、君たちね。まったく、ディレクターには怒られるし、桐生君は勝手な約束しちゃうし。君らちゃんとギター弾けるの？しょうがないなあ。いいか、前座はやらしてやる。ただし。条件がある」
今度はマネージャー氏の目が“キラリ”と光った。

その７　～夢、幻のブルージーンズ前座ステージ～

　ご立腹のＴＢＪのマネージャー氏が前座ステージに出るために提示した条件とは…。

①　チケットの販売。ノルマ２０枚。

②　コンサートポスター８０枚を市内に貼付。

「大したこたーねーや」と軽く引き受けた４人。

チケットはひとり５枚ずつだから何とかなったんだけど、ポスターは手を焼いた。

平塚駅前の繁華街を中心に商店を１軒１軒廻ったのだが、なかなか貼らせてもらえない。

半日で１０枚程しか消化できない。さあ困った。

　仕方なく電柱に貼っていると自転車に乗ったおまわりさんが通りかかった。

「だめだよ、君たち。勝手に貼っちゃあ。許可もらってるの？」

「え？、だってコレ、公共のもんでしょ。いいじゃないですか」

「ダメダメ。電柱は東京電力、電信柱は電電公社。許可がないとダメなの」

「へ？、電柱と電信柱って違うの？どこが？」見上げる４人。

「とにかくダメ！。はい、ちゃんとはがして。あ～あ、ずっと向こうまで貼ってある」

　仕方なく順番にはがしていった。おまわりも自転車押してずっとついてくる。

　交番の前まで来たところで、

「じゃあ、残り全部はがすんだよ。本官はここまでだから…えっ、あっ、ああっ！」

おまわりがびっくりするのも無理はない。

ナント、交番の掲示板にも貼ってあったのだ。

『この顔にピンときたら１１０番』人相の悪い指名手配犯がズラッと並んだ写真の横に寺内御大のニコッと笑ったでっかい顔…。

「お前ら、何やってんだ！。中に入りなさい！。ったく、いまどきの若いもんは…」

交番の中で延々説教を受けた４人。
「おまわりさん、エジプトのピラミッドの壁になんて書かれてたか、知ってます？」
「何、４千年後にエレキの神様がこの地上に舞い降りる、とでも書いてあったのか？え？」
「あのね、解読したらさ、『いまどきの若いもんは…』って書いてあったんだって。４千年前から変わってないんですよ、いまどきの若者は。でね、貼り紙は街の美観を損ねるって言ったけど、美観を損ねてるブスがいっぱい歩いてるじゃん。あいつらこそ逮捕しなきゃあ、美観損壊罪とか不快容姿陳列罪。だからいいじゃないポスターぐらい…」
　イソ公得意のへ理屈が始まった。しかも警察官相手に、である。やばい。
「おい、やめとけよ。あっ、どうもすいませんでした。こいつ、チョットおかしいんです
「こいつ、東海大で一番のバカでして。松前総長も手を焼いてまして。はい、これから気を付けますから」
　あわててイソ公を連れ出した。こんなリーダーを持つメンバーの心労は計り知れない。
　３０年後の今、ピアスしてるいまどきの若い男に腹立ててるこの男。モロにいまどきの中年。

「おいイソ公、ところで当日はアンプとかドラムセットとかはどうすんだよ」
「そんなもん、運べるわけねーじゃん。俺ら車もねえし。ブルージーンズのヤツを借りるしかねえよ」
「ええっ、貸してくれるの？あのでっかいヤツ。すげーなー、俺のギャバンのレスポールでもいい音すんだろうな」
「そりゃそうさ、あんな安物でも。かっつうの下手クソなカッティングがモロに響くな」
「やべっ、」
「ってことはよう、俺はあんな高いところでドラム叩くのか？あ～緊張してきた。」
　いよいよ当日。昼ごろに平塚市民会館に到着。今日は機嫌のいい、

マネージャー氏。
「じゃあ今、緞帳下げるから。緞帳の前に君らの楽器、セッティングしてよ」
「え、あの～、アンプは貸してもらえるんでしょ。ドラムも…」
「貸してって？あのねえ、まさかＴＢＪの楽器使うつもり？出来る訳ないだろうが。えっ、アンプもドラムも持ってこないって？」
「だって、ボーヤたちだって公演前に使ってるじゃないですか。向ヶ丘遊園で」
「ああ…だめだこりゃ。いいか、こういうホールでのコンサートってのはな、お客さんは緞帳が上がるのをワクワクして待ってんだよ。そこでゆっくり緞帳が上がる。目に飛び込むのはでっかいスピーカーや機材がデーンと。なっ、コレでお客さんの視覚に迫力を訴えといて、ジャーンと大音量のステージが始まるって訳だ。みんな計算し尽くしてんの。ウチのファンやっててわかんないかなあ。まったく、いまどきの…あっ、やばい、開場時間、遅らせなきゃ」
かくして前座ステージの夢は幻と消えた。あのポスター貼りの努力はいったい…。
「イソ公、どうなってんだよ！バカヤロー」
「うるせー！、誰だ、俺が東海大で一番バカだの、おかしいヤツだのって言ったヤツは！」
４人の間に不協和音が響いた。ステージの端に腰を下ろし、みんなブスッとしてる。
そんなＴＥＲＲＹＳの心情を察してくれたＴＢＪドラムスの山本進一さん。
ブルージーンズの真っ赤なツアーバスに誘ってくれた。
「こちらは寺内タケシとブルージーンズです。本日６時より、平塚市民会館に於きまして、寺内タケシとブルージーンズ　ダイナミックコンサートを開催いたします…」
平塚市内を街宣して走った。
「おう、こんな調子でな。次、お前ら順番にひとり５回。俺はこのネコと遊んでっから」
市民会館の裏で拾った子猫と遊んでる山本さん。頭をポンと叩くと子猫がニャア。

４人が順番に、「えー、本日６時からぁ『ニャア』…市民会館でぇ『ニャア』…前座のＴＥＲＲＹＳは残念ながら出ませんが…『ニャアォ～』…」

我々４人と山本進一さん、バス運転のスタッフさんも大笑い。

ブルージーンズ。みんな優しくて、楽しくて、面白かったなあ…

その８　～真冬のソナタ　あんたはどなた？～　パート１

えー毎度ばかばかしいイソ公の「テケテケ伝」もいつの間にか第８作となりまして、もうやめよっかなーと思っているってぇーと、この話によく登場するドラムの天野高広つうおっちょこちょいが、やれ「あんな事もあった」だの「こんな事もやった」だの、挙句には「俺の出番が少ない。もっとかっこよく書け！」と、ちょくちょく電話をくれまして、言う方は簡単でしょうがァ。書く方の身にもなってみやがれっ、ちくしょうめ。

もうひとりのレギュラー、ベースの石田定正はってぇーと、この男、第１期ＴＥＲＲＹＳで一番最後までイソ公にくっついてったもんだから、現在その後遺症に悩まされておりまして、只今リハビリの真っ最中。病名は「重度の人間不信症」。イソ公が知らん顔して「そりゃお前、自業自得ってもんだな」と傷に塩塗るような訳のわからん励ましをしたんで少しばかり回復が遅れております。

以上、本編レギュラー陣の近況をご報告いたしました。

えっ、イソ公？そんなもん知るか！暫く会ってないわい！！

今回からはバンドを少し離れて、イソ公の悪行を徹底的に糾弾しようと思いまして。

この「テケテケ伝」、作者の意に反して気が付けばイソ公のサクセスストーリーとなりつつあって、軌道修正が必要な状況であります。７月７日付の「イソちゃんのわがまま日記」読んでから、特に痛感しましてね。

えっらそうに。こいつの今がさも自分の実力みたいに言ってますが、冗談じゃねえっ！

自分の好きな事やるにゃァ金がかかるって、あったりめーだろうよ。

マイホーム主義が負け犬だァ？ふざけんな！。多くのメンバーの将来をめちゃくちゃにしときながら…グスン…。

という訳で、今回からは若者の純真な淡い恋心をもてあそぶイソ公の真の姿を暴く超大作、その名も「真冬のソナタ　あんたはどなた？」長編になります、たぶん。

盟友、石田の冥福、いや回復を祈りつつ、私は書きます、真実を。正義のために！！。

話は、高校時代までさかのぼります。

当時、悪魔のイソ公はわが校の生徒会長でして。

今でもそれを自慢してるんですが、生徒会長選挙に立候補したイソ公の対抗馬ってのが空手部の猛者でね、詰襟高２０センチ、ひざ下までの長ラン、頭はツッパリリーゼントで剃り込みがテカリ。眉毛をきれいにそり落としてる。

こんなふたりの立会演説会だから、結果は当然イソ公の圧勝。口だけは達者、当時から。

天野も石田も、そして私もいまだに言ってます。

「あん時、イソ公に１票入れたのが、今までの人生で最大の汚点だった」ってね。

まあ、これだけでどの程度の高校かはお察しいただけたと思いますが。

こん時、演説会なんかやらないで、壇上でデスマッチでもやってイソ公の腕でも指でもへし折ってくれてりゃあ、今のこん畜生はいなかった訳で、みんな幸せだったのに…。

一方、私、かっつうは当校の名門、フェンシング部のエースでして、自分で言うのもなんですがカッコよかったのであります。

女生徒からは「リボンの騎士みたい～」とか「２０世紀の怪傑ゾロ」だとかキャーキャー言われてまして…フン、そんな夢を見ておりました。

生徒会長なんかより、「目指せ！インターハイ！」こっちの方がカッコいいでしょ？

フェンシングの合間にギターやってたんだから。

「リオの若大将」、これって、フェンシングだからね。俺ってやっぱ、田沼雄一だよな！

そんなモテモテの私ですが唯一、恋焦がれた女の子がいたんですよ、すっごいかわいい娘。

悪い事にイソ公と同じ３年４組。あ～それだけで不吉な予感。するでしょ。

彼女の名前を仮に「なぎさ」としときましょう。
このテケテケ伝、ノンフィクションで、登場する人物名、団体名はすべて実名でやってますが、彼女の名前だけは匿名で。私の大切な思い出ですから…悪しからず。
このなぎさちゃん、おとなしくて、清楚で、頭がよくて、もちろん可愛くて。
チョットだけタレ目です。だけど、それがまたかわゆい。卓球部でね。フェンシング部の隣でいつも練習してたの。
ウブなかっつう少年。最後までなぎさちゃんと一言の会話も交わすことなく、卒業してしまいました。
♪～好きだよと言えずに初恋は　振り子細工の心
放課後の校庭を走る君がいた　遠くで僕はいつでも君を探してた～
寺内ファンの故 村下孝蔵氏に、合掌…チ～ン！
初恋は、いつの世も虚しく、せつないものなのですね…ん～胸キュン。
ところが最近の高校生カップル、だらしない制服姿で昼間っからベタベタしやがって！
ったく、最近の若いもんは…ってこれ、前回のテーマでしたね。
そんな淡い恋心をペロっとイソ公に漏らしちゃったのが、私の不徳の致すところ。
で、こっから先はこの「テケテケ伝」その1から7まで、もう1度順番に読んでくださいな（閲覧カウント上がるし…）。
そして、１９７４年１２月、ＴＥＲＲＹＳもみんな１９歳になり、期末試験に突入していった。
勉強するかと思いきや、勉強なんてクソ食らえ！
「おい、１月５日、清水の山口楽器店のホール押さえたぞ！ＴＥＲＲＹＳの新春コンサート、やろうぜ！」
毎度やたらとスケジュール取ってくるのはドラムの天野。お前もちったあ勉強せい！
さあ、年が明けて、このコンサートがかっつうの悲劇の始まりでした。
くっそー、イソ公め、全部ばらしたる！！！

その９　～真冬のソナタ　あんたはどなた？～　パート２

前回のこの連載にイソ公本人からご丁重なるご返事を頂きまして。まるで冷蔵庫の下に隠れてたゴキブリみたいに「やっと出てきやがったな、コン畜生！」って感じでね。ハハハ、五十棲君、勝手にほざきたまえ。ウソで固めたその人生をワイキキの波で洗い流してきやがれ！

無視して３０年前に戻りましょう。で、イソ公の陰謀にじわじわと引きずり込まれてく若きヨン様の物語、その続編。

年も改まって１９７５年（昭和５０年）１月５日。清水の山口楽器店ホールに於いて「ＴＥＲＲＹＳ新春コンサート」を開催した。

この頃、しばらく私と石田のパートが変わって、私がベース、石田がサイドになってまして、このコンサートではかっつうがベースです。どうでもいいんだけど…

さあ開演。いつもどおり「テリーのテーマ」で始まって、お決まりの三方に挨拶。

最後に中央にペコッと挨拶して頭を上げたその瞬間、ドキッ。あの憧れのなぎさちゃんが、な、なんと客席中央に座ってるじゃないですか！

「ええっ！？な、なんで？」もう、何がなんだかわからない。頭ン中真っ白。曲の合間にイソ公に聞いた。

「おい、どうなってんだよ。何で彼女が来てんだよ」

「えへへ。彼女の前でかっこよく決めろよ」

そうなんですよ。イソ公がなぎさちゃんを呼んでくれてたんです、同じクラスのよしみで。

「今年はいい年になるなあ、彼女も出来んじゃねーか？きっと。なあ、かっつう、へへ…」

ＭＣでもいつになく私に振ってきた。

イソ公って、本当はいいやつだなァ。俺、こいつの為なら死ねる。そんときゃ思いました。

で、その後なぎさちゃんとはどうなったかって？
ステージ後に楽器片付けてる間に、帰っちゃいましたよ、なぎさちゃん。さっさと。
卒業以来およそ１年ぶりの再会だったのに、またもや一言も交わすことなく…
「おめー、ホントに愚図だな、なんで声かけねーんだよ。せっかく呼んでやったのに」
「…」

短い冬休みも終わり、再び大学に戻ったＴＥＲＲＹＳ。後期試験の後半戦が始まった。
その日、私が２号館地下の学食で昼飯を食っているとイソ公がやってきた。
「おう、かっつう、やっぱここか、探したぜ。隣、空いてるか。またコロッケうどんか。正月早々貧しいねえ、それ８０円？、俺、スペシャル定食、３５０円。このサラダ、食っていいぞ。俺、嫌いだから」
「うるせぇーな。いらねーよ」
「あっ、そう。じゃあ捨てちゃうか、サラダ。うめーぞ、ここのスペシャル定食。」
「何だよ！、俺はうどんが食べたいの。用がね～んならあっち行けよ」
「怒んなよ。いい知らせがあんだよ。お前に春が来たんだよ」
「はあ？」
「お前、今度の日曜日、当然ヒマだよな」
「今度の日曜？だめだめ。月曜日に政治学原論の試験だから。俺、前期赤点だったからさ、今回やばいんだ」
「ほお、政治学原論で赤点？、ばっかじゃん。あんなのどうやったら赤点取れるの？」
「取っちゃったもん、しょうがねーだろ」
「よし、試験は俺に任しとけ。でな、女の子、紹介してやるから。うれしいか？」
「俺はいいよ。天野か石田でも誘ってやれよ。あいつら昨日、麻田奈美のポスター買いに行ったんだぜ、例の『りんごヌード』。淋しいんだねあいつら。彼女紹介してやれよ」

「ダメ、お前じぁなきゃ。何でいやなの。あれっ？やっぱ噂はホントだったんだ。へぇー」
「何だよ、噂って」
「聞いたぜぇ。お前んとこの下宿の娘。えーと、真弓ちゃんって言ったっけ？やっぱ出来てたんだ。あ～あ、大家の娘に手～出しちゃった。高校生だよな、やばいよ。犯罪だぜ」
「バ、バカ言うな！何もしてねーよ。お祭り行っただけだよ、真田神社の…」
「へー、一緒にお祭りねえ。ホントに何もなかった？そう、じゃあいいじゃん。実はな、新春コンサートの後でさ、かっつうさんにもう1度会わせてって、手紙が来たんだよ」
「はあ？だ、誰が？」
「誰がって、コンサートに来てたじゃん。見ただろ？イヒヒ、この～色オトコ！憎いね～」
「え？まさか、なぎさちゃん？え、ウソだろ！！」
「うふふふ…俺ァよく解かんねーよ、お前のどこがいいのか。愚図だし、ギターは下手だし。彼女が俺に何とかしてくれって言うもんでさ。まあ、メンバーの為にゃァ一肌脱がなきゃな。リーダーのつれーところよ。」
「なぎさちゃんが俺に会いたいって言ったのか？ホントだな？」
「いいよ、無理すんなよ。勉強やんだろ。『かっつうは大家さんちの真弓ちゃんと出来ちゃいました。あんたなんか好きじゃありません』って言っとくからさ、じゃあな。おっ、残したサラダ食う？」
「ま、待てよ。今度の日曜だろ。行く、絶対行く」
「よ～し、御殿場ファミリーランドな…」

追記：イソ公の奥様、次回までに離婚届用意しといて下さい。
この続き読んだらキットはんこ押したくなりますから。
押したらすぐ、市役所へ…。ＧＯＯＤ　ＬＵＣＫ！

ご愛読者のみなさまへ

テケテケ伝をご愛読いただき誠にありがとうございます。
日頃のご愛読に感謝しまして、特別付録をご用意いたしました。
本文にも登場した例のモノ、，７０年代に大流行しましたよね。
おとうさんもお世話になったでしょ。イヒヒ…
もったいぶって「袋とじ」仕様です。
でっもって、以下をクリックしてください。１８歳未満厳禁です、ウフフ…。

※リンク先はもう無くなってしまっているので、特別に貼っときますよ、サービスサービス♪

その１０　～真冬のソナタ　あなたはどなた？～　パート３

記録的な猛暑。新潟、福井の集中豪雨。今年は異常気象だそうで台風も東から西へ。

そういえば静岡、清水を襲った集中豪雨、４１名の犠牲者が出たいわゆる七夕豪雨はこのテケテケ伝スタートの昭和４９年７月のこと。我等ＴＥＲＲＹＳがビヤガーデンに出演した３週間前だったなあって、今思い出してね。清水市内を走ってた静鉄のチンチン電車もこの時の被害で廃線になったし、市内の其処此処にその傷跡が残ってたなあ。そんなときにトップレスのＧＯＧＯパーティーをやったＴＥＲＲＹＳはもしかして復興支援の旗手だったりして…

で、月日はさかのぼって昭和５０年１月。

「おう、かっつう。いよいよ明日だな。御殿場は寒いからな、寄り添って歩けるじゃん。そうだ、彼女、友達連れてくるからさ、俺はそっちの方だから。中に入ったら別行動でな」

「うん、わかった」

「いいか、帰りも別々で。いいぞ、御殿場ファミリーランドは。周りはラブホテルばっかじゃん。がんばれよ」

「ば、ばか！なぎさちゃんはそんな人じゃねえよ」

「何言ってんのかねえ。成り行きってもんがあんだよ。初めはそんなつもりなくてもさ、手つないだり、肩組んだりしてるうちにだな、どちらからともなくなんかそんな雰囲気になっちゃうんだよ。それが男と女ってもんだ。お前、パンツぐらい新しいのはいて来いよ」

「イソ公、何でそんなに詳しいんだ？」

「そ、そんなもん、常識だよ。恋愛の常識…」

その日の夕方、私は一人で街に出た。

「おばちゃん、パンツちょうだい。もちろん白、綿１００％ね。ＢＶＤがいいな、ゴムのところに赤いラインがあるの。げっ、何でこんなに高いの、Ｍａｄｅ　ｉｎ　ＵＳＡ。しゃあないか」

続いて本屋に立ち寄った。

こんな時、当時の若者が頼りにしたのは今は亡き奈良林　祥先生。ベストセラー「Ｈｏｗ　ｔｏ　ＳＥＸ」を手に取り店の隅っこでこそこそ立ち読み。うわっ、すげえ！
買う勇気がなかったんじゃなくてね、私、アイドル系清純派ギタリストだから…えへ。

いよいよ、当日。
小田急大根駅（現東海大学前駅）で待ち合わせ、御殿場線に乗り換えて御殿場駅へ着いた。
「イソ公、俺、ションベン行って来る」
「またかよ、何緊張してんの。もうすぐ彼女らの上り電車来るから我慢しろよ」
「すぐ戻るから。あー寒い」
トイレから戻るとイソ公がいない。「あれ？」あたりを見回してると声を掛けられた。
「あのー、ＴＥＲＲＹＳのかっつうさん…ですよね」
「はあ…」
初めて見る女の子。んー…目測ながら身長１４５センチ、体重８５キロ。スリーサイズ…計測不能。若秩父によく似たアンコ型。
「あー、よかった。」
「はあ？あんたはどなた？」（やっと出ましたこのセリフ。「真冬のソナタ　あんたはどなた？」のタイトルがここで成立。ふぅー長かった）
　そこへイソ公が女の子とやってきた。
「なーんだ、もう会っちゃったのか。まっ、改めて紹介しとくか。こちら、Ａ子さん、かっつうに会いたがってたの。そしてこの子がＡ子の友達のＢ子さん。ヨロシク…じゃ、行こっか」
「い、行こっかって、おいイソ公、チョットこっち来いよ。何だ、どうなってんだ」
「どうって？。Ａ子がお前紹介しろって言うから。それでお前も来たんだろうが」
「冗談じゃねーよ、なぎさちゃんが来るって言ったじゃんか！」
「俺ァそんなこと言ってねーよ。『テケテケ伝その９』も１回読んでみな、一言もそんな事言ってねーから。お前が書いたんだろ」

「は？何をワカランこと言ってんだよ。なぎさちゃんが来るって言うから俺ァ来たんだぜ」
「うるせーな、なぎさ、なぎさって。いいか、はっきり言っとくけどな、なぎさはお前なんかにゃ興味ねーんだよ。だけどA子はお前が好きなんだって、それでいいじゃんか」
「よかねーよ。あっ、解かった。やいイソ公。お前、初めっからB子が目的だな。B子を紹介してもらいたくって、俺をダシに使いやがったな」
「おっ、かっつうにしちゃあ勘がいいな。そのとおり。いいじゃん、彼女が出来るんだし」
「やっぱそうか、畜生、俺帰る」
「か、帰るって待てよ。訳はゆっくり後で話すから、なっ、今日はこのまま行こうぜ」
「やだね。帰る。絶対帰る！。今日使った金も全部返してもらうからな！電車代と、BVDのパンツ代…あっ、やべっ、言っちゃった」
「BVDのパンツだぁ？ははーん、初デートでもうHなコトしようとしてんの。みんなに言ってやろっ、『かっつうスケベ』って」
「だ、だってお前がそう言ったじゃん、男と女は成り行きがどうのこうの…」
「いやらしいよ、お前って最低。ハレンチ。ま、今回のことは誰にも言わねーからさ。な、ギター教えてやってるの俺だろ。今日のところはな、一緒に行こうぜ」
「……」
　イソ公ってヤツは窮地に追い込まれても相手のちょっとした弱点を突いてあっという間に形勢逆転しちゃう男だ。

　ファミリーランドに入ってからも、私は黙ったままイソ公について行った。
「なんだよ、かっつう。別行動だって言っただろ。向こう行けよ」
「やだ！」
「俺たちゃ観覧車に乗るから。お前らはこのままっすぐ行けよ」
「俺も観覧車」
　冗談じゃない。スカート履いた若秩父なんかと2人きりになんてな

れるか！

こうなりゃ、４人一緒でグループ交際を装うしかない。

１年前はフェンシング部のエースだぞ。「リオの若大将」だぞ。その俺様が何でこんな目に遭わなくちゃなんねーんだ。みんなコイツのせいだ。イソ公が悪いんだ。

目的のためなら手段を選ばず、仲間だろうが誰だろうが騙してでも徹底的に利用し、相手が傷つこうがお構いなし。イソ公とはこういう男だ。

この後、どうやって帰ったかはまったく記憶に無い。ひとりで帰ったのかイソ公と一緒だったのかはどうしても思い出せない。

ただ、事実として記憶にあるのはその後Ａ子とは一度も会ってないこと、政治学原論はついに卒業ぎりぎりまで単位が取れなかったこと。そして青春の胸を焦がしたなぎさちゃんへの淡い初恋の憧れが一気に崩れ去ってしまったこと。

しかしコレだけの仕打ちを受けながらその７日後の「ヤマハライトミュージックコンテスト静岡大会」にＴＥＲＲＹＳのベースで出てるんだから、このかっつうという男も寛大と言おうか、オオバカもんと言うべきか…。

今ではアウトレットモールに変貌し、連日若いカップルで賑わいを見せている御殿場ファミリーランド跡。東名高速で御殿場ＩＣ付近を走行する度に、私の胸は複雑に締め付けられるのであります。

あ～あァ、なんでこんなもん書いてんだろもうや～めたってか？　…

おわり

え？その後のイソ公とＢ子はどうなったかって？

頼むからそんな事俺に聞かないでよ、思い出したくもないんだから。

…私の記憶が確かならば、２ヶ月ばかり付き合ったみたいよ、Ｂ子と。

でもってさ、今度はＢ子の友達のＣ江にちょっかい出してネ。それがバレてどっちもだめんなったみたい…ははは　懲りないイソ公、ざまーみやがれ！

その１１　～テケテケ伝こぼれ話～

　イソ公の「テケテケ伝」も前回が記念すべき１０回目だった訳で、その割にその１０のエンディングが筆者にとっては空しい結末であったんで、だいぶ落ち込んでるときに「グレッチなおったよ～」って電話がヤツから入りまして。２年も前ですよ、修理出したの。
「かっつう、カントリージェントルマンのビンテージ１００万はするぜ。リペア５万位だから１５万で絶対買いだぞ」ってそそのかされてあたしゃ買いましたよ、即金で。
　お宝鑑定で「わァ１００万円！」って島田紳助が叫ぶのを期待して。ところがどうだい、当ホームページのＢＢＳだかＢＣＧだかＤＤＴだか知らねーが、ヤツのいいぐさ。なんで御殿場でコン畜生と絶縁しとかなかったんだろ、って言うより３０年たってもコン畜生の毒舌に翻弄されてるかっつうも情けないヤツでして。
でもなーんの見返りもなくて毎週こんなもん書いてるかっつうって偉いなーって自分を褒めてる私です。

　でもって、今回は今までの１０作の中で文章の構成上カットしちゃった出来事をいくつか拾ってみようかと。（早い話が手抜きなんですけどね、頭ん中、お盆休みでさ。いつもか）
なんたって思い出すままにキーボード打ってるもんだから、うまくまとまらなくって、結構ボツにしちゃってるんでね。
これでも結構苦労して書いてんですよ、文才ないから。

こぼれ話その１
　元々、ＴＥＲＲＹＳは高校まではブルージーンズＪｒって名前でしてね。テリーズって寺内企画にあったんです、ＧＳブームのときに。だからテリーズって使わなかったんですよ。
で、ビヤガーデンに出るときに改めて名前付けようってことになって、最初は「羅生門」って付けたの。丁度ＴＢＪが同名のアルバム出した後でね、芸術祭参加作品。コレがいいってことになって。趣味悪いでしょ。４人揃って考えてこの程度の発想、馬鹿だネエ。

ステージごとに「こんばんは、ザ　羅生門でーす」ってやってたんだけど、あるときお客から「おぞましい名前だなあ」って冷やかされて、途中でＴＥＲＲＹＳになった次第です。

こぼれ話その２

　ビヤガーデンに出たときに、宿泊の部屋を用意してもらったんだけど、コレがなんと布団部屋でね。６帖位の部屋の４分の３は布団で一杯で、その隙間に４人で寝ろって言われて。

クーラーも無いし、網戸も破れてて窓開けると蚊が入ってくるし、とても寝られたもんじゃなかったんですよ。で、イソ公と石田はこりゃタマランって２日目からは自宅から通いになって。

私と天野は実家が沼津だったんでとても通えないんでずっと泊まってたんです。

ＧＯＧＯガールのアイリーンとリカのふたりはホテルのツインの客室で、冷房ガンガン。

プロダクション通した芸人と自ら売り込んでった芸人のこの格差。惨めだったなあ。

「あんたち、可哀そうだね。こっち来なよ」って部屋に誘われて…でへへへへ。

屋上から生ビールと串が焼け落ちた焼き鳥と、残った枝豆を持ってきて朝方まで４人で…。

あっ、ヘンな事想像してるだろアンタ、スケベ！

前回書いたでしょ、あたしゃ清純派ギタリストだって。

天野のこたァ知らねーよ、おいらがリカの足元でうずくまって寝ちゃった後の事は。

知らねェ、絶対知らねェ、知っててても言えねェ。おいら、イソ公と違って口堅いから。

こぼれ話その３

　そう言えば、このホームページの中にこの頃の第１期ＴＥＲＲＹＳの写真が何枚かありまして。

　例えばベルボトムのジーパン履いて、ギターとベースが向かい合ってるヤツ、右がイソ公で抱えてるのはモズライトのＵＳＡ。再生産始

めた頃の７２、３年製だったかな？だからヘッドのベンチャーズロゴは無し。新宿のエルク楽器で１９万８千円で買ったもの。何故か金持ってたイソ公。

左のベースが石田定正でグヤトーンのＪＢ、５万円也。このグヤトーンは今も現役で、私の大学生の甥が「ビンテージだ」って使ってます。かっつう一族は今も貧しい。

真ん中のずっと後ろでドラム叩いてるのが天野高広。パールのセットだったっけ？

私はってえともっと右でモラレス弾いてんですがカットされてます。実際には写ってるんです。イソ公が意図的に削除してんです、きっと。他の写真にも私だけは１枚も写ってません。イソ公のイジメです、絶対。

来る８月２２日、静岡でのＴＢＪコンサートに久しぶりにみんな集まります。楽しみです。

主催者から要請があれば、寺内御大と並んでサイン会やってもいいんですが…。

えー、５月に連載開始のイソ公の「テケテケ伝」。管理人のピースケ氏にも、もちろんイソ公にも何の前触れもなくスタートしちゃって約

３ヶ月。この辺でチョット夏休みを頂こうかと、これまた勝手に思っちゃいましてね。
まだまだハチャメチャなＴＥＲＲＹＳの活動は続くんですが、甲子園も応援したいし、アテネも始まるし。何よりもう一度記憶を整理しないと。
イソ公が改心したら、また出てきますよ。ってことは、次回はイソ公への弔辞だな…。
でもこいつが生きてるうちにまだまだ言いたい事はあるんでね。
まあひとつの区切りとして、とりあえず今までのご愛読ありがとうございました。
暑さ厳しき折柄、皆様にはくれぐれもご自愛ください。じゃ、またね～。
ハリウッド映画風に終わるなら、この後ＴＥＲＲＹＳは芸能プロダクションと契約します。そして…。

その１２　～プロ契約への道～

前回からひと月程お休みいただきまして、「何だ、まだやんの」って言われそうだな～って怖い気持ちを抑えつつ、恥ずかしながら帰ってまいりました「イソ公のテケテケ伝」。
チョット怠け過ぎたかなー。
「夏の間遊んでたキリギリスさんはね、冬に死んじゃうんだよ」って母の背中で聞いたおとぎ話を今、深くかみしめているかっつうです。頑張りましょ。
でも、やっぱりアリさんにはなれない私。
「前回までのあらすじって事でもう１度その１から書き直しゃァあと１１回はもつじゃん」ってピースケに言ったらダメだって。融通の利かない奴だ。こうゆう奴ァ出世しないからね、適当に付き合っていればいいよね、きっと。

で、昭和５０年１月。
私にとって屈辱の御殿場ファミリーランド事件の１週間後、我等ＴＥＲＲＹＳは「ヤマハライトミュージックコンテスト静岡大会」に出ましてね。
１月５日の清水山口楽器でのＴＥＲＲＹＳ新春コンサートの後、ウチの演奏を聞いてた店長から「出ないか？」って誘いがありまして。
「ウチはオリジナル曲ないからダメでしょ」
「うーん。残念だなァ。オリジナルやれば絶対全国大会行けるよ。そうすりゃプロの道も開ける。まっ、入賞は出来ないけど、ゲストって事で出なよ。ヤマハに頼んどくから」
「あ～ァ、プロだってよ…しょうがねーな」
そんな訳で「津軽じょんから節」と「運命」やって、さっさと帰ってきちゃいました。
「俺等の方がよっぽどうめーじゃんな」って。

大学っつ～のはやたらと休みの多いところで、１月の後期試験が終わればまた２ヶ月あまりの春休み。しかしＴＥＲＲＹＳのスケジュー

ルは空白のまま。
　そんな時、例によってイソ公の下宿に屯してる私と石田定正の中に飛び込んでくるのは毎度のごとくドラムの天野高広。
「おい、ビッグニュース！　東京のプロダクションのオーディション、受けられるぞ。いよいよ本当のプロへの道が開けるぞ！」
「相変わらずにぎやかな野郎だな。なんだよ、今度は…」
読者の皆さんは覚えていらっしゃるだろうか、「テケテケ伝その３」のエンディング。
　忘れちゃった方は、はい、もう１度。

「でな、あん時のＧＯＧＯガールのアイリーンから連絡があってさ。ウチの事、社長に話してくれてオーディションやってくれるって。東京のビーナスプロってとこ。受かりゃァすぐにでも仕事はあるってよ、スゲーだろ！」
「おっ、そりゃァスゲーじゃん。よーし、受けようぜ」って乗ったのはイソ公。
「おい、チョット待てよ。二人とも本気か？」と躊躇したのは石田。
「俺も気が進まねーな。いいじゃんか、今のままで。楽しいしさ」と私。
　プロ入り推進派のイソ公と天野、慎重派の石田と私の議論は深夜まで続いた。

　バンド活動というのは、その成長過程に於いていくつかの岐路に遭遇し、その都度もめる。
気の合った友達同士が「エレキバンドやろーぜ。目指すはＴＢＪ！」って結成したＴＥＲＲＹＳ。
この頃は最高に楽しい。みんなもっと上手くなりたいって思ってるし、それぞれが一生懸命練習もする。レパートリーが増えてくのが嬉しくってしょうがない頃。
そのうち人前で演奏したくなって、知り合いをかき集めて自主コンサートをやってた時期。
こりゃまたもっと楽しい。自分たちの出来る曲だけ一方的にやってりゃァいいいんだから。

小さいながらもステージに立ちゃァ一端のスター気取りでね。「俺ってビッグ？」ってカンジ。これが麻薬みたいなモンでして。まあここまでは順調にいくんだよ。

それでも物足りなくなって、ビヤガーデンやスナックへ売り込むんだね。今度は知らない人たちにも聞かせよう、俺たちゃ上手いんだからさって、不特定多数のお客にも絶対ウケルって思い込んじゃうんだな、これが。

ところがこっちがベンチャーズ演ったって、「ベンチャーズ？ダサいぜ。クラプトンやれ」、とか「カーペンターズ歌え！」とか…。今までジコチューでやってきたのに、たとえ３００円でもギャラ貰ってりゃあ今度はお客やオーナーに合わせなきゃいけない。これが結構辛いんだネェ。

この「テケテケ伝」じゃあサラッと流したけど、ビヤガーデンやスナックでのお客のリクエストは苦労しましたよ。ステージの合間はほとんどリクエスト曲の音探しだったね。楽譜もテープもないんだからさ、メロディ口ずさみながらコード探し。

「俺達ゃ、ビートルズ嫌いなんだよ」って言いたいけど言えない。

だから今回のプロ入りはもめた。

好きな時に好きな曲を好きなようにやりゃァいいじゃんって意見と、もっと上を目指したい、って考え。

あの夜はみんな真剣だったな。いつになく…。試験期間中だってのに。

「どうでもいいけどさ、なあ天野。何でお前んとこにアイリーンから連絡あったんだ？」

「えっ、いやあ、あったんだよ、それが…。何でだろな…。ああ、おかしいか？だからそのォ…おい、かっつう、何でだ？　まあ、いいじゃんか…」

「…おめェ、吐け！何があったのか、全部吐いて楽ンなれよ…」

ってな訳で、ＴＥＲＲＹＳがオーディションを受けることになりまして。

果たしてその顛末は…次回までお預け…ワン！

その１３　～オーディション必勝法～

東京の新大久保駅前の雑居ビルに「ビーナスプロ」という芸能プロダクションがあった。
前年夏のビヤガーデン出演時に共演したＧＯＧＯガール、アイリーンとリカが所属するプロダクションである。
昭和５０年１月下旬、ＴＥＲＲＹＳの４人はオーディションを受けるため小田急線に乗った。
石田が心配そうに口を開いた。
「なあ天野、オーディションってどんな事やんだろうな」
「さァーな。知らねよ。ギターだけ持ってくりゃいいって聞いただけだよ」
「ったく使えねー奴だな。アイリーンにちゃんと聞いとけよ、大事なことだぜ」
「なんだよ！俺のおかげでオーディション受けられんじゃねーか。感謝しろよ」
「お前のおかげじゃねーって。アイリーンとリカには感謝するけどな」
「チェッ、面白かねーな…」
まったくまとまりのない連中である。
「まあまあ、なんで殺気立ってるのさ。オーディションっていやァ『スター誕生』でしょうが。な、みんな一番得意な曲歌ってんだろ。オーディションてなァそうゆうもんなの」
「ほお～、かっつう、意外と頭いいな。そうか、それがオーディションか。じゃあ、俺ら運命か？じょんからか？どっちにする？、イソ公よ」
「ん～、そうさなあ、どっちにしてもお前らが一番楽な曲じゃんか、俺ばっかきつい…」
新大久保駅に着くと改札口にアイリーンとリカが出迎えに来ていた。半年振りの再会。相変わらずド派手な格好だ。しかも厚化粧。人ごみの中でもよく目立つ。
「よおー、久しぶり。ふたりとも元気そうじゃんか」

「あー、懐かしいね、イソ公君に天野君に石田君。元気だった？…あっ、キャハハ、かっつうだ。おい！、かっつう！生きてた？」
（何で俺だけ呼び捨てなんだよ、何でキャハハなんだよ、何でおい！なんだよ、生きてるよ俺は、ムッ）

事務所は駅前。昔話もそこそこに、薄暗い階段をのぼって社長を紹介された。
「ああ、ご苦労さん。話は彼女たちから聞いてるよ。夏には随分お世話になったそうだね」
「いえ、こちらこそお世話になりました。私がリーダーの五十棲です。よろしくお願いします」
（へえー、こいつも一応ちゃんとした挨拶は出来るんだ、知らなかった…）
「早速始めるよ、忙しいからね。スタジオ行ってて、すぐ行くから」
「スタジオってどこっすか」
「ああ、この上ね、スタジオ。４階行って」
「スタジオ、スタジオ、スタジオ、スタジオ。はい」
「はあ？？…おい石田ァ…」
「だって、スタジオ４回言ってって…」
「ばか！。　すいません社長さん、こいつかなり緊張しちゃって。」
「…。リカ、上に案内してやって」
「うん」
「うんじゃないだろ、『はい』って。何度言ったら分かるの！」
「（ブスッ）は～い…」
「コラ！『はい』だろ、『はい』。ったくもう、どいつもこいつも…」
（う～ん、ここのやり取り、明らかに三流ネタっぽいな。反省…でもホント）

「みんな落ち着けよ。いつもどおり演りゃァいいからな。で、かっつう、お前はいつもより上手く演れ。みんな分かったな」
「なんだよ、俺だけいつもどおりじゃダメなのかよ」
「ダメ！」
チューニングを確認したところで社長が入ってきた。さっきの石田

のボケで完全に俺たちをバカにしてるって感じ。こいつら、絶対無理だなーってね。
「じゃあ、始めるよ。今から楽譜配るから、初見で演ってもらうからね。打ち合わせ無しだよ」
ドキッ！初見かよ、まいったな。だめだこりゃってみんな思いましたね、こんときゃあ。
　配られた譜面は「ふたりでお酒を」梓みちよの当時の大ヒット曲。しめた！ラッキー！！
ビヤガーデンに出たとき、支配人が大好きでねこの曲。毎晩演奏しろって言われてたのだ。
　しかし、ウチはＥｍで演ってたのに譜面はＡ♭ｍ。フラットが１、２、３、…７つも。
やっべェ…。

　っと、このときイソ公の目が久々にキラッと光った。　ゲッ、何だよ今度ァ…
「社長さん、チョットだけ時間ください。繰り返しなんかの確認だけですから、３０秒、いや１０秒だけ」
了解をもらってイソ公がみんなを集めた。
「いいか、いつもどおりＥｍでいくぞ」
「ええっ！、いいのか？」
「しっ！、声がでけーんだ、バカ！！。しゃあねーだろ、イチかバチかこれっきゃねーぜ。だけど、ハイポジションで弾けよ。ローコードは使うな、バレるからな。よし、いくぞ」
「ジャーン～恨みっこなしで　別れましょォよォ～」って歌はないんですけどね。

「いやァ～すごいよ、初見で演れるなんて。君らホントに１９歳？、決まり！合格だよ！」
　社長が拍手しながら歩み寄ってきた。さっきとコロッと態度が変わってる。
「どうもありがとうございます…」
「やったァ！」

アイリーンとリカも大はしゃぎだ。
「ね、社長。この子たち、上手いって言ったでしょ。あたしら一緒にやってて、絶対いけるって思ってたのよ。あーよかった」
「よかったね、みんな。おい、かっつう、あんたも合格だって。キャハハ…」
「おいリカ、ちっと黙ってろや。でも…あはは…ありがとな」

だけど運が強いよなー、ＴＥＲＲＹＳって。
かくして（キーを隠して）、ＴＥＲＲＹＳは晴れてプロ契約を結んだのであります。
しかし、これからが苦難の連続で。
芸能界の常識とかしきたりとかって複雑だし難しいんだな、これが。そんな事などまったく考えちゃあいない脳天気なＴＥＲＲＹＳ。
帰りの小田急線の中じゃあ周りの迷惑も顧みず、大はしゃぎの４人であった。

「おやァ？あんた、もしかして芸能人の天野さんじゃないの、あはは…」
「おう、そう言うあんたは芸能人の石田さん。スタジオって１００回言え！　ぎゃははのは」
「そうだ、かっつうってサイン考えなきゃあな、カッコいいやつ。キャッチフレーズも」
「バーカ！　俺なんか『天才ギタリストの五十棲登場！』ってなァどうだ、ドヒャァ！！」
「ははは…俺らプロだってよ、芸能人だとさ、だははは…」

ふう～　こんなバカどもの「テケテケ伝」　いったいいつまで続くのやら…とほほ…私、もうやなんだけど…つづく…

その１４　～ＴＥＲＲＹＳ　プロデビュー計画～

しっかし、昭和５０年１月はいろんなことがあったねえ。
５日にＴＥＲＲＹＳ新春コンサートでしょ。なぎさちゃんと１年ぶりの再会。「今年は人生最良の年になるなー」って思いましたね。
それから１週間後に思い出したくもない御殿場ファミリーランド事件。イソ公に奈落の底に突き落とされまして。
で、またその１週間後にライトミュージックコンテストに出て、またまたその後オーディション受けて…。試験期間中だったのにほんとに勉強してねーやつらだ。

１月３０日。晴れて合格したＴＥＲＲＹＳの４人はビーナスプロ事務所に呼び出された。
今後の活動についての打ち合わせをするという。
この「テケテケ伝」その９から今回がその１４だからひと月を６回も引きずっちゃって…
ちょっとくど過ぎたな…。

まず、社長からこの業界での注意事項の話がありましてね。
先輩、後輩の序列が厳しいだとか、活動はすべて事務所を通せだとか。長い事話してたけど、ほとんど聞いちゃあいなかった。難しいことは４人とも苦手。
そして話はいよいよ核心に移った。ＴＥＲＲＹＳの活動についてである。
「君たちには当分の間、アイリーンと組んでやってもらう事にしたから。バンド名も『アイリーンとテリーズ』。いいね」
「はあ？『アイリーンとテリーズ』？…」
「ああ、どうしてもボーカルは必要だから。アイリーンなら歌も出来るし、踊りも出来る。もちろん、君らの好きな寺内タケシやベンチャーズも演っていいんだよ、ステージの状況によっては。これは事務所の方針。さっきも言っただろ、君らの事はすべて事務所で決める。分

かってるね」
「あ、はい…」
できりゃァリカの方がよかったな、歌も踊りも下手だけどかわいいから。
「それと、君たちはこれから２４歳ってことにするから、１９歳の大学１年生じゃあ、ナメられるし、未成年だとうるさいから、この業界。アイリーンは女だから２０歳」
「えー、俺たちが２４歳でアイリーンがはたちって、だいぶ無理があるじゃないんですか」
「いいの。アイリーンは老けてて君らは童顔なの。えーと、ホントはヒツジ年？、じゃあ今日からは、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未だから…寅年生まれだ。分かったね」
「……」
　まあ、アイリーンと組むのはいいけど、２４歳ってのはいやだった。１９歳の当時から見れば２４歳なんかオジサンだもんね。
後日、ブルージーンズのベーシスト、新庄ハジメさんにその話をしたら大笑いされまして。
「そりゃおかしいな。若くさば読むってのはよくあるけどな。俺なんか１７の時ジャニーズ事務所でハイソサエティやって、ブルージーンズ入ったのははたちの時だぜ。ナメられた事なんかないな。まっ、実力があれば年なんかカンケーねーよ、この世界。あはは…」
「むっ…」

「それから君らのギャラなんだが、派遣先の条件によって色々だから一概に決められないがね。まあ通常ホテル、クラブ、ビヤガーデンで１ヶ月のステージで、１ヶ月ひとり８万円ってとこだ。単発ステージはその都度決める。地方の場合の宿泊はこちらで用意するから。いいね」
８万円は驚きだった。当時の仕送りが５万円だからね。
夜だけギター弾いてそんなに貰えんの、すっげえなァ～。
「あのー、宿泊ってまさか布団部屋ってことはないですよね？」
「ははは、聞いたよ。夏のビヤガーデンじゃあ君ら布団部屋だったっ

てな、アイリーンが言ってた。ウチの仕事は絶対そんなことないから。
しっかし何でそんな契約しちゃったの、布団部屋なんて。」
そんなこと言ったって知らなかったもの、ＴＥＲＲＹＳのバカ共は…

確か２月に鬼怒川温泉のホテルに１ヶ月って話しもあったんだけど
さ、２月はまだ試験があるからって断った。学業優先ってことでね、
一応。

で２月は事務所のスタジオで練習に明け暮れた。
当時は貸スタジオなんてどこにもなかったから、片道２時間かけてよ
く通った。
所属してるほかのバンドの練習も見たんだけど、みんな上手かったな。
やっぱプロは違うなーって思いましたよ。

１度立派な写真館に連れていかれて、プロモーション用の写真撮る
って。
２、３回衣装変えて、いろんなポーズとって。
アイリーンが真ん中でイソ公が横でサンバーストのモズライトを立て
て。
１歩後ろで私がギャバンのレスポール、石田がフェルナンデスのジャ
ズベー抱えて、天野がスティック持ってすまして立ってるの。ブロマ
イドみたいでさ、カッコよかった。
どこ行っちゃったかなァあの写真。メンバー全員誰も持ってない。
公開できないのが残念です。

２月も押し詰まった頃、３月に茨城県土浦のディスコ「グランドコ
ンパ」の仕事が決まった。
「おい、土浦だってよ。寺内の地元じゃんか。寺内節、ウケるぞ！」
そして次回。　いよいよ土浦のディスコに１ヶ月入ります。
懐かしい曲名が出てきますよ、きっと…

その１５　～いよいよプロデビュー！　初ステージの怪～

３月１日、ＴＥＲＲＹＳ改め「アイリーンとテリーズ」は茨城県土浦市の繁華街にあるディスコ「グランドコンパ」のステージに立った。結構広いホールだ。
確かディスコって言葉はなかったね、当時。
以前はゴーゴー喫茶ってのがあって、そのあとコンパって言ってた。
土浦あたりでも連日若い連中が集まってきて、にぎやかだったな。
出演日はかなり不定期だった。１０日ほどぶっ通しもあれば２連休があったり。
夜６時から３０分ステージを５回演った。

今でも忘れない、記念すべきプロ最初の演奏曲は「京都から博多まで」…はあ？
そう、若い人は知らないだろうな、藤圭子のヒット曲。　宇多田ヒカルのお母さんだよ～ん。
次がリリィの「私は泣いています」、また藤圭子の「新宿の女」と続いて…みんなアイリーンのボーカルでさ。
我ら４人もバックコーラス入れたりハモったりして。　みんな演歌ばっか。
おいおい、なんだよその曲は、って思われた方、多いでしょうねえ。
つい数日前にココの仕事が決まった時、社長に言われた。
「今までどおりのステージにアイリーンの歌をメインで入れてくれりゃいいから」って。
でも、アイリーンて演歌が好きでね、声の調子も演歌系。
みんなこういったホールがどうゆうモンなのか分かっちゃいなかった。
もちろん「ブルドック」「ウェストサイドギター」「テキーラ」「テストドライバー」などのベンチャーズ系ロックンロールも演ったけど…
だからどうもおかしくって、このステージ。
お客も踊っちゃいるけど、怪訝そうにこっちを見上げてる。
ノリが悪いって言うか、ほとんどシラけてるって言うか…？？？？？

ステージ合間の控室。
「なあ、なんかおかしいよな、このステージ」
「かっつうの歌が下手なんだろ」
「はいはい、♪だーれのせいでもありゃしねェー　みーんなおいらが悪いのさ～ってな。いっつもそうだ、ばっかやろー。やい天野、オメーのドラムも重てーんだよ、リズムが…。石田、テメーも音はずしてんじゃんか、下手くそ！！」
「いや、なんか違うな、ココは…」

不完全燃焼のまま、宿舎に帰ってきた４人。いや、もうひとりアイリーンも。
宿舎は郊外のマンション。２Ｋの間取りに我々４人、アイリーンは隣の２Ｋひとり独占。ブサイクだけど一応オンナだから。
アイリーンも含め５人で部屋に集まったのは深夜０時を過ぎた頃。
カルビーのカッパえびせんと湖池屋ポテトチップスをつまみながら…
「…なんでだろ」
「俺らの演奏、おかしくねーよなあ」
「うーん、なんか今日の客は変だったよ」
「そうだな、客のノリが悪かったな、踊り下手だったもんな、みんな」
「おう、やっぱ静岡よりゃ田舎だな、茨城は、ははは」

ここでアイリーンが口を挟んだ。
「あんたちね、お客さんにウケないのはあたしたちが悪いの！。バカ言ってんじゃないよ！　ココのお客さんは踊りたがってるの、演って分かんなかったの？」
「な、なんだよ急に怒りだして。びっくりするじゃんか」
「さっきから聞いてりゃァ、誰が下手だの音はずしただのって。挙句にお客さんのせいにしちゃって。　あんたちは間違ってるよ。お客さんが踊れるように演るのがプロでしょ」
「じゃあ何を演れってんだよ」
「今、お客さんが踊りたい曲に決まってんでしょ！」
「じゃあ、あんたは何歌うんだよ、梶芽衣子の恨み節も歌いたいって言ったじゃんか、演歌でどうやって客が踊るんだ！」

「だから、どうしようかって考えてんのよ！」
5人で怒鳴りあったな、この夜は。
確かに社長のいい加減な言葉を真に受けて、流行り始めたコンパってどうゆうところなのか、どんな曲が好まれるのかなんてまったく考えもしなかった。
だだ、自分たちのレパートリーの中の曲だけ演りゃァいいだろ、くらいの気持ちだった。

「でもなあ、確かに俺らプロだもんな。アイリーンの言うとおりだよな」
「よし、丁度明日から2連休だ。今流行りのダンス曲、演ってやろうぜ」
「演ろうって、どんな曲があんのかも知らねーんだぜ、どうすんだよ、イソ公」
「ちったあ頭使えよ、天野。レコード屋行きゃァなんか売ってんだろ。LP2枚で24曲じゃんか、とりあえず当分はいけるぜ」
「げっ、2日で24曲も暗譜すんのか？　なーんも知らねーのに？」
「さっ、頑張ろうよ、みんな。　あたしたちプロバンドなんだから」
「はあァ、だからプロなんてなるのやめよって言ったじゃんか、俺。トホホ…」
「こら、かっつう。　あんた、泣いてんの？」
「♪私は泣いています、ベッドの上で…チクショ～！、俺ァ沼津帰りてェ～！」
「ふん！　バーカ」

これがプロ初日の話 in 土浦。
この先どうなる事やら…

その１６　～ダンス音楽コピー大作戦～　パート１

まあね、オーディションの課題曲が「２人でお酒を」で、演歌好きの女性ボーカルが入ったんだから、ＴＥＲＲＹＳはプロ契約したとたんに歌謡バンドになっちゃった訳で、必然的に。
で、土浦での初日にお客にウケなくて悩んだ４人がとった行動は…。

３月２日、朝。
８時頃「アイリーンとテリーズ」の５人はバスで土浦市街へ出た。
明け方近くまで激論を戦わせていたのでみんな目が腫れぼったい。
アイリーンは相変わらずの厚化粧だ。　そんな時間あったんかね。
１度だけスッピンを見たけど、ひどいもんだったね。この世のモノとは思えなかったな。

駅前商店街の喫茶店でモーニングを食べながら、レコード屋の開店を待った。
ウエイトレスに聞いた。
「ねえ、寺内タケシの生家ってどこにあるか知ってる？」
「おいイソ公、生家って言うなよ。なんかずっと昔に死んじゃった人みたいじゃんか」
「何でだよ、石田。生まれた家だから生家でいいだろ」
「なんかさ、野口英世の生家とかってとっくに死んだ偉人の文化財みたいだぜ。俺の生まれた家は実家だ、生家とは言わねえ」
「ばーか。石田はな、もともと生まれたとは言わないの。わいたって言うの」
「なんだそりゃ。わいたって、ぼうふらかうじ虫みてーじゃんか」
「がははは…。石田はわいた。天野は孵っただな、おたまじゃくしにみてーにな。大人になってもせいぜい蛙がいいトコだ。アマ蛙。　でもってかっつうは…うーん、蘇生したってのはどうよ？」
「なんだ、俺ァ死損ないかよ！」
「そう言うイソ公はなんだ？ええ？生えただ。そう、雑草かカビみてーにみんなの嫌われ者。だけどシブてーからなかなか死なねえ」

「おう、上等だよ。生えたで結構だ。うじ虫よりゃましだわな。ねえ、ウエイトレスさん」
「…で、何の用ですか？」
「えっ、何だっけ？。そうそう、寺内タケシのね、えーっと知ってる？寺内って」
「ああ、それならあっちの方。そんなに遠くないから行けばわかりますよ」
「じゃあ、みんなで行ってみようぜ。近いってさ。今から行こうぜ」
「あんたち、ダメでしょ。これから２４曲練習すんだから。また今度！」
「ちぇっ。あー、やだやだ。アイリーンなんかと組むんじゃなかったぜ…」

レコード屋へ行ってレコードを探した。
「最新ダンス音楽全集」みたいなのを２枚買ってね。
そのあと質屋へ行ってレコードプレーヤーを１台買った。　ちっこいの。

さて、昼過ぎに部屋に戻ってからがそりゃあもう大変でして。
プレーヤーを囲んで車座になって胡坐かいて、ギター抱えて。
１曲づつ何度も聴いては譜面にコード進行書き取って。　これは大体イソ公の役目。
石田と私はリズム拾って楽譜に書いて、イソ公が書き上げたコードを後で書き写す。
こっちが必死こいてやってるときにひとりボケーっとしてるのは、そう天野。
「オメーもちったあ手伝えや、ったくもう」
「ドラムにゃあコードなんかねーもん。俺ァ知ィ～らねっと」
協調性のない奴だ。
「やい天野。夕飯買ってこいや。夜食もな！！、全部オメーのおごりだ、チクショウメ！」
「チェッ」

どんな曲だったかっていうとね、「ブラックマジックウーマン」「君

に捧げるサンバ」「オエコモバ」「バンブー」「迷信」等々…。
　ロックンロールとか演歌って基本的には3コードの循環でしょ。
キーコードから5度上げて、そっから2度上げて、またキーに戻る。
これならＴＥＲＲＹＳだって覚えられたんだけど。
２０曲ほどの譜面起こすのに深夜まで掛かった。
部屋にアンプはないから音は出せずにコード進行探ってさ。
ベースの石田なんか「音が聞こえねーじゃんか。どうするよー」って
半ベソかきだして…。
部屋の壁にベースのボディ押し付けて壁の振動で音聞いてんの。
アイリーンは英語の歌詞を必死で唸ってる。コブシ廻すんじゃねえ
よ！
やっと天野もレコード聞きながら膝叩いてリズム取り出した。
「おい、ここの8小節、かっつうがメロディだ。ちゃんと覚えろよ」
「げっ、コードだけで勘弁してくれよ～。な、イソ公、頼むからさぁ」
「うるせえ！そうゆう曲なんだよ。間違えんなよ！！」
みんなかなり苛立ってる。

「あー、だめだ。もう限界…」
ギター抱えたまんま仰向けに寝転がった。ああ、左の指先が痛い。
　ふと見ると窓の外はうっすらシラんでる。　牛乳屋の自転車の瓶が
ガチャガチャぶつかる音が窓の下をとおり過ぎた。
誰かがポツンと言った。「あぁ、鳥が鳴いてる…」
スズメもカラスも目覚めたらしい。
目を開けているのが辛い。間もなく、みんなそのまま眠り込んだ。

その１７　～ダンス音楽コピー大作戦～　パート２

当時のＴＥＲＲＹＳは「ステージに楽譜は持ち込まない」ってのが鉄則だった。
「ブルージーンズがそうだから」ってのがその理由。　いたって単純。
唯一の例外は「今日この曲演って」って渡された曲の楽譜だけ。
しかも楽譜を見ていいのはその日限りで、翌日には暗譜して出た。
これが結構お店には評判良くてね。店長や支配人に褒められちゃって。
「君らは大したもんだよ。プロ意識に徹してるよ」って、それが１番欠如してたのに…。
「いやあ、当然ですよ。譜面見ながら弾いてたんじゃ迫力も出ないし、第一お客さんに失礼ですよね」ってまあ当時から口は達者だ、イソ公は。

しかし若かったんだなーって、つくづく思いますね。二日続けての徹夜だもの。
明け方に寝てもちゃんと９時には起きた。
３月初旬に畳の上でそのまま寝ちゃたから寒いのと背中が痛いので目が覚めちゃったってのが本当のところだけど。
今日もステージは休み。その辺に食い散らかした昨夜の残り物を適当に腹に詰めて、また地獄の練習が始まった。
とりあえず楽譜は出来上がっている。　順番にレコードを聴きながら音の出ないギターでコード進行とリズムを確認していく。
「ここんトコ、ベース走れよ、石田」
「あいよ…」
「あいよって、大丈夫か？」
「ドラムソロ。ココの４小節。めいっぱいだぜ、天野」
「いや、ココは押さえ気味のがいいんじゃねーか？ラストで盛り上げるっての、いいだろ」
「そうか？　まあ、やってみるか」
「おい、かっつう。出だしはオメーのスリーフィンガーだ。テンポは大丈夫だな」

「任しとけって。♪～♪～こんなんでいいだろ。よーし、ばっちり決まったぜ。どーだい」
「まあな。でも任せらんねーから言ってんの！」
「じゃあ、次。オエコモバ、いくぞ」
前日よりだいぶ余裕は出てきたな。
　まあ、こんな調子で２０数曲、順番に仕上げてってね。
でも、コレを全部暗譜しなきゃなんねーのよ。
アイリーンも一生懸命英語の歌詞覚えてる。
彼女は沖縄出身で、英語はそこそこ堪能だったの、こう見えても。って誰も見てませんよね。
沖縄返還からまだ３年目だったからね、当時は。

　もう、窓の外は真っ暗。
「あー、腹減った…。なんか食いに行こうぜ」
「バス停の手前を入ったところにラーメン屋があったぜ。ラーメン食いてー」
「そういやァ、こっち来てからまともなもん食ってねーな」
「なあ、目途もついたしさ。明日は早めに行って、ちゃんと音出して練習しようぜ」
「そうだな、だいぶ疲れてるしな。よし、今日の練習終わり！」
「やりィ！。さっ、ラーメン、ラーメン、ララランラン♪」
この夜は３日ぶりに布団で寝ることが出来た。

　翌日は昼過ぎには店に行って、開店前の４時間ほどステージでの最終確認。
ここでまた、あーじゃないのこーじゃないのって、ドタバタしましたけどね。
何とか６時のステージに間に合わせてね。
まあ、お客のノリも上々のようでして…

「はあ、今日は疲れたなァ。こんな緊張したステージは初めてだよなあ」
夜、部屋に戻っての反省会。

みんな車座になってね、何故か天野は1升瓶抱えてる。
「まあな。今日は反省するこたあねーだろ？飲もうぜ、な、かっつう。あはは」
「まっ、よかったよ。おい天野、酒よこせ。はいアイリーンもコップな。おっ、1級酒じゃんか。奮発したな、天野。じゃあ、いっただっきまーす！」
「クーッ、うめえ。久しぶりだな、酒飲むの。やっぱ1級酒はうめえ。でへへ…」
「あっ、忘れてた。はいよサキイカと柿の種。芸能人だからなかっつうさまは。奮発したぜ俺も。ピーナッツ入りだ。お金持ちじゃん、ギャラ8万だもんねー」
「君たちもなんか飲んだら？ミルクか？赤ん坊みてえだな。うひひひ」
「オメーら、どうしょうもねえバカだな…」
そう、イソ公と石田は酒飲めねーの、今でも…
「飲めねー奴は無視してさ、アイリーンも今日はしこたま飲もうぜ、おっとっと」
「がはは…」

で、始まったばかりの土浦「グランドコンパ」のステージ。
とりあえずの難関は突破して、この後1ヶ月続きます。
レパートリーもどんどん増えていくんだけど、お客さんからウチの演奏にクレームがつきましてね、このあとすぐに。
で、お客のニーズを掴むためにイソ公がとった行動とは…
そのために、宿舎のこの部屋がとんでもない事態になっちゃいまして。
それはまたこの次のお話…

その１８　～仁義なき戦い　イソ公のケンカ必勝法～

『喧嘩が強くて威張ってられるのは中学までででな。はたち過ぎて腕力で威張ってる奴は所詮頭が悪い。で、こんなバカ共に痛い目に遭わないためには一番強い奴と仲良くなる事。まあ、無手勝流ってヤツよ、ど～よ』ってのがイソ公の持論でね。

「俺ァ逃げる。後は知らねーよ、逃げのかっつうって、桂小五郎みてーにな」

「俺ァどうすんだよ。足ァ遅いしな、俺…」これ、ベースの石田。

まあ、こんな他愛もない話をしょっちゅうしてたんだけど。当時…。

「おい、変な話きいたんだけどな。ウチの前に出てたバンドさあ、ココの常連客にボコボコにされちゃって大けがしたらしいぞ！」

「なんだ、そりゃ」

天野が従業員に聞いた話によると、生意気だってのが理由らしい。それで慌てて急遽別のバンドをってことでビーナスプロに話が来たんだそうな。

「どおりで急だったもんナ、社長もどんなところだか全然知らなかったしな」

「でもさ大丈夫だよ。俺たちの中で生意気そうに見えるのはイソ公だけだろ。俺も天野もかっつうも心配ねーよ」

「やい石田、どうゆうこった。俺だけやられるってのか」

「うん、可能性はあるはな。イソ公、顔色悪いぜ、いひひ…」

この時から客の中で一番強そうな奴の詮索が始まって。私は知らない。イソ公だけね。

この頃のディスコってのは曲によってみんな同じステップ踏んでてさ。

それも店ごとに決まっていたらしい。

ステージから見てると確かに全員揃った動きしてる。だから一見客は踊れない。

それを暗黙のうちに仕切っているのが常連客の中の１グループだって

のが分かってきた。そいつらがココじゃあ一番強い奴らだ。　奴らが前のバンドをボコボコにしたに違いない。

１回３０分ステージっていうと大体７～８曲演奏する。それが１日５回だから４０曲ほどのレパートリーが必要なんだけど、ウチはまだ２０数曲だけでしょ、ダンス曲は。

演奏曲数を減らすために、イソ公は間奏にアドリブ入れてかなり長く引っ張った。

バックで演ってるこっちにチラッと目で合図して、あとはどこまで伸ばすかはイソ公次第で、こっちにゃァ分からない。必死でついてくのに精一杯でさ。

確かその日の３回目の演奏が終わって、楽屋に戻ろうとステージを降りた時だった。

「よう、オメーっちのリーダーって誰だ？おォ？」って不意に声を掛けられて…。

見るからに怖そうなお兄ちゃんとお姉ちゃん。族風って言うかヤンキーっての？

「あ、コイツですリーダーは。イソ公って名前で生意気です、コイツ」

これ、天野。

言うだけ言ってぱっと石田の影に隠れた。

私はアイリーンと楽屋まで逃げた。そっと戸を開けて様子を覗き見てた。

「オメーっちの演奏な、踊りにくいんだよお。ちゃんと弾いてくれや、アンちゃんちよお！」

このチンピラどもね、確かに怖そうなんだけど茨城弁がモロ出てて…。

「はあ、どうゆう事ですか…？」

「なんで途中で曲換えてんだよォ、ちゃんと弾けってんだよお」

「いや？変えてないですよ、おかしかったですか？」

「ばっきゃーろ！全然違うんだよお。レコード通り演ってねーじゃんか」

「は？」

つまりこうだ。決まったステップしか出来ないもんだから、途中で

アドリブ入れちゃあ踊れねーって事。
「ああ、ウチのアレンジじゃあダメってことね。わかった。その代わりね、あんたたちの踊りたい曲、教えてよ。出来ればレコード貸してくれりゃァその通り演るから」
「よーし、前のバンドより素直だな。オメー等、ココの店の宿舎に泊まってんだろ、あのマンションだな。わかった、今夜レコード持ってくから」

　その夜、宿舎に戻って。
「なんだ、あいつら。曲に合わせて踊るのがダンスだろ？」
「自分らの踊りに合わせて弾けって、バカじゃんなあ、イソ公」
「まっ、その程度のバカ共だな。だけどな、奴らがココの顔だぜ。前のバンドをボコボコにしたのは奴らだ、間違いねえ」
「なんだイソ公。怖いのか？、やっぱ生意気に見えらァ、オメーは」
「俺ァ逃げのかっつうだ。とにかく逃げる、沼津へ帰るかんな。後は知らねーぞ」
「ば～か、何度も言うな。いいか奴らの踊りたい曲を演っときゃあ安泰だ。奴らバカだからレコードまで貸してくれるって言ってんだ。利用しない手はねーぜ。レパートリーも増えるってモンだ。俺って賢いだろ、ど～よ」
「ええ？じゃあ、奴らがレコード持ってきたらまた覚えんの？今夜？うそだあ」
「イソ公がボコボコにされりゃァ済むことじゃん。俺らァ知らねーよ」
「なんだよオメー等！。あのなァ…あ、来た…」
　外が急に騒がしくなって、5～6人の族が乱入したって感じ。
アイリーンなんか血相変えて隣の部屋へ逃げ込んだ。
私は逃げそびれた、今度は…。
「おう、レコード持って来たぜ。チャンと演れよな」
「はあ、えーっと、『ゲットレディ』と…はあ？『プラウドメアリー』？これ演んの？それから…えっ『ファンキーモンキーベイビー』って、キャロル？…」
「おう、明日はチャンと頼むぜ、レコード通りにな。じゃあな。　おっと、キズ付けんなよ、エーチャンのは特に。ヨロシクゥ！」

あっという間にレコード4、5枚置いて帰って行った。
「…」
「エーチャン？何だ、それ」
「キャロルの矢沢永吉だろ。やっぱ、どうしょもねえバカ共だな、奴ら…」
「おーい、アイリーン。大丈夫だ、もう帰ったぜ奴ら」
「あー、怖かった。ねえ、あんなのと付き合わないでよ、もう」

「どうでもいいけどさ、今日ココに最後に入ったのだれだ、石田か？チャンと鍵掛けとけよ。奴ら、ドカドカ入ってきたじゃんか。これっから用心しねーとナ」
「え～？、俺ちゃんと掛けたけどなあ…？？」
「掛け忘れたから入ってきたんじゃねーか。ちゃんとしろよ！！ばーか」
「おっかしいなァ…」

翌日のステージ。
奴らは来てる。　約束どおりアドリブは省略して原曲通り。「ファンキーモンキーベイビー」も「プラウドメアリー」も演って。
「おう、お前らヤルじゃんか。昨日よりずっと上手くなったな。またレコード持ってってやるからな。うん、前のバンドよりズーットいいぜ。じゃあなヨロシクゥ！」
肩いからせてガニマタでってチンピラそのままの格好で帰っていった。
「へっ？昨日より上手くなったってよ、俺ら。褒められちゃった、ははは」
「だから言ったろ。仲良くなっときゃあ痛い目に遭わねーって。だけど何度も言うけどホントにバカだ、奴ら…」
「いやァ、アイリーンの言うとおり関わんねー方がいいんじゃねーの」

前回の最後に、この部屋がとんでもない事になっちゃって…って書きましたけど、紙面の都合上書ききれなくなっちゃいまして。
だから次回に回します。

そこんとこ、ヨロシクゥ！

その１９　～思い出の土浦～

まったく、周りがうるさくってね、昨今は。
もう、イソ公の思いどおりにゃァならねェってってトコ見せてやんなきゃ、奴が可哀想だからね。ツッパリますよ、かっつうは！

で、本題に入ります。　前回の続き…
いつも深夜に戻ってきてから私と天野は酒かっくらって。
イソ公と石田は下戸だからコーラ飲みながら、相も変わらずバカっ話ばっかで。
「なあ、今日の前の方で踊ってた長い髪の娘、可愛かったな」
「ばーかイソ公、あんなの趣味か？」
「オメーにゃァ言われたかねーよ、なぎさよりゃ可愛いじゃん」
「ああっ、イソ公、また思い出させやがったな。オメーのおかげで俺ァな…グスッ」
まあこんなもんで、バカな１９才は…
「あっ！やいイソ公、また屁ェこきやがったな！臭せェ」
「あ、ホントら、クッセェ。ゲホゲホッかっつう、まろ開けろ、いしょげ！ヒック！」
「えへへ…うん、今日何食ったっけ？強烈だな。あはは…」
「バッキャァロー！いい加減にしろ、イソ公め！」
「かっつう、何やってんら！早くまろ開けろって！ヒック」
「ははは…俺ァ酔っ払っちゃった、へへへ、足もつれちまって歩けねえ…イヒヒ…」
「ばーか、どうしょうもねえな。イソ公は屁ェこくし、天野はろれつ回わんねーし、かっつうは立てねーし。どうしょもねーやつらだな」
「がはは石らだってばーかじゃん、ヒック、似たようなもんら、おらたちゃ。グエッ！」
毎晩こんな調子でね、練習のない時は。

一夜明けて、昼ごろごそごそ起きだして。
「ふぁあ～。腹減った。食うもんなーんもねーぞ。どうすっか…」

「うわっ、部屋中酒くせェ」
「うるせえなァ、イソ公の屁よりゃいい臭いだ」
「なあ、今夜は休みだからさ、寺内のウチ見に行こうぜ。生家でも実家でもいいからさ」
ってんで、４人で街に出た。アイリーンはお留守番。まったく興味は無いようで。

土浦駅周辺じゃあみんな知ってた。
駄菓子屋のおばあちゃんに聞いたらさ
「寺内タケシ？、ああ、ココまっすぐ行ってね、広い駐車場があるから。そこが敷地だから。家はすぐわかるよ。ねえ、あの坊っちゃんも立派になっちゃってねえ…」って。
さすがは寺内タケシ。坊っちゃんだって。
確かにデッカイ家だ。家の周りぐるぐる廻って遠巻きに眺めて。
夕暮れ迫るまで４人で飽きもせずに…。

６時頃だったかな、部屋に戻ったのは。
「アレェ？おっかしいな…鍵あいてらァ。チャンと閉めたはずだけどな…」
「おい、また石田か。しっかりしろよ。無用心だなァ、まったくもう」
ドアを開けると見慣れない靴が４、５足。
「しいっ！おい、中に誰か居るぞ。ドロボーか？」
そおーっと中に入ってみると、ええっ！ん、なんだこりゃ？？？
「よう、お帰り。邪魔してんぞ」
って、例のグランドコンパの常連チンピラ連中だ。
「な、何してんですか！こんなトコで」
「おう、お前ら今日は休みだろ。遊びに来てやったよ。ほれ、差し入れだ」
ビールやらスナック菓子やら煎餅やら、どさっと持ち込んでてね。
「部屋の鍵掛かってたでしょ。どうやって入ってきたの」
「鍵持ってんだよ、ほら」って鍵を振って見せた。
この仲間の中にグランドコンパの従業員がいてさ、そいつが合鍵を店から持ち出していやがったの。

「…」

それっから昼夜を問わず、押しかけてくるようになっちゃって。奴らいったい仕事してたんだろうかね。

いつも2～6人ぐらいで入ってきては大騒ぎしてさ、そのうちシンナーまでやり始めた。

ラリっちゃあ部屋ン中で暴れだしたり、奇声を上げたり。

注意しようもんなら虚ろな目で睨みやがって、何されるかわかんない。怖かったな、あん時ァ。

こりゃまずいって一時、隣のアイリーンの部屋に避難したんだけどね、奴らだけになると一層オーバーヒートしちゃってさ、隣の部屋までうるさくって…。

「おい、やばいぞ、もうやだよ俺ァ。沼津へ帰るぜ」

「大体なァ、イソ公が悪いんだぜ、奴らと仲良くなってりゃいいなんて言い出すから…」

「おう、まいったな。どうすっか」

「だからァ、こうなりゃイソ公がボコボコにされるっきゃねーよ。みんなそう思うだろ？」

うなずく3人＋アイリーンも。計4人。対するイソ公、たったひとり。がはは…。

「ウルセー！！奴らがココまでのバカだとは思わなかったんだ、しょうがねーだろ。大体なァオメー等、俺がヤラレたらステージどうすんだよ、ええ？！」

「いいじゃんか、両手だけは止めてくれって、殴るのは顔と腹だけにしてくれりゃァこれからも踊れるぜって言やァ。奴ら踊りてェんだから解かってくれるさ」

「なんだとオ！やい、天野、テメーってヤツは…」

「そりゃいいや、顔腫らしてギター弾けよイソ公。かっこいいぜ、多分な、ははは…」

そんな日が10日程続いたが、ある日からピタっと来なくなった。店にも来ない。

後から聞いた話だが、どっかで暴力だか恐喝だか窃盗だか知らないが事件起こしちゃったらしい。

いろんなことがあったプロ初仕事。
解かっていたつもりでも、プロってのは厳しいもんだって痛感したね。
いま思い出すと、こんなんでよくやってたなあって感じだけど。
楽しかったけど辛かったし、面白かったけどいやだった…
世間知らずって言うのか怖いもん知らずって言うのか解からないけど、
こんな事してたんだな～って。赤面しちゃいますね。
最初の仕事が土浦だったってことも何かの因縁があったのかな、イソ公にとっては。
　忘れられない街だね、土浦は。

　でもって、４月に大学に戻ったＴＥＲＲＹＳ４人。
みんな見事２年生になりまして。って２年になれないヤツはいない。
　ビーナスプロでは次の仕事が決まってた。
４月末のゴールデンウィークから７月末まで東京新宿の紀伊国屋ビル屋上のニュートーキョービヤガーデンで、前期試験が終わった８月からは宇都宮の同じ系列ビヤガーデンと８月中まで決まってて。
まあ、売れっ子バンドでありました。ホントに！…？　　それはまた…。

ええ？？次回はテケテケ伝２０回目？
どうしょっか

その２０　～マル秘　ＴＥＲＲＹＳ式練習風景～

　前回でＴＥＲＲＹＳの土浦でのプロデビューの話が終わっちゃって、しかも２０回めだから「なんか記念号にでもすっか？」って言ったらイソ公が「おう、いいな。面白れーコト考えようぜ」って。
ピースケだって「いいねえ、協力しまっせ」って言ったくせになーんも考えちゃくんないんだ、ふたりとも。
「おい、次はいつ載せるんだよ。早くしろよ、相変わらずノロマなヤツだな」って文句言ってきやがった、こいつら。
ったく、なんでこんなもん書いてんだかわかんね～よ。
カネも貰っちゃいねーのに。
愚痴ったって、こいつらの性格が変わるもんじゃないからさ。今年は前向きに考えましょ。
だから今回も普通の「テケテケ伝」その２０。

　当時のＴＥＲＲＹＳの練習ってのは、イソ公の４畳半の下宿に私と石田と天野が行ってやったんだけど、もちろん安下宿だから音なんか出せないんでね。
　イソ公が採譜したコードだけが書いてある楽譜渡されて、レコードを何回も繰り返し聴きながら私と石田は楽譜を指で追いかけて。
「おう、ここんトコ。かっつうはリズム変えてな、こんな感じだぞ」
「ああ、そこはいいんだけどな、ココのリードとハモるところはどうやって弾きゃァいいんだよ。指が届かねージャンか」
「４弦の５フレから弾くんだ。３弦開放なんかではじめるから後が続かねーの。５フレを薬指から押さえてみろ、ばーか」
「ほー、イソ公。オメー頭いいな」
「ああ、俺ァ頭いいけどな。かっつうはオオバカってんじゃねーかい、世間じゃあ」
「…くそったれ、イソ公」
３人でコタツの天板にギターのヘッド乗っけて増幅させて音を出して。
天野はひたすら膝叩いてる。
　そしてステージ上の演出まで考えてた。

「でな、ココはかっつうが俺の横まで出てきてな。ギターヘッドをチョイと上げてさ。いいか、そんときはしっかり胸張って客席に目を向けるんだぞ、じょんからのエンディングみたいにさ。立ってやってみろ」
「こんなかね？へっ、こりゃ無理だ。フレット見てなきゃ弾けねーよ」
「ダ～メ！その方がかっこいい」
「そんなのどーでもいいじゃんか。間違える方がよっほどかっこわるいじゃんか」
「だから、間違えずに弾けよ。そこまで出来てこの曲は完成だ、いいな…だけどオメーのガニマタ、何とかならんのか」
「しょうがねージャン。俺ァフェンシング部のエースだ。ガニマタは勲章だぜ」
「わっ、だっせえ！　女にもてるワケねーな、絶対！」

楽譜とカセットテープをそれぞれが持ち帰って、次のステージまでに練習してきてね。
本番前のリハーサルで初めて全体のチェックして、即本番ってのが当時のＴＥＲＲＹＳ。
このリハの時に覚えてなかったりしようもんなら、さあ大変。
イソ公は怒鳴ったりって事はあんまりなかったんだけどさ、曲の途中でもジャ～ンってかき鳴らしてすげえ形相で睨みつけてね。
あれはスナック「メイク」に出てた時の「エルクンバンチェロ」だったか「ラ　クンパルシータ」だったか「ふたつのギター」だったっけかな。
「もう１回！！」
ってやり直すんだけど元々こっちゃァ覚えて来てないんだから、また同じところで引っ掛かる訳で。
またジャジャ～ンってかき鳴らして、睨みつけて。

控室に戻ってみんながワイワイやってる時も、メンバー全員が完全に無視しやがって、私のコト。
「練習しろ」すら言わないでさ、とにかくみんな無視すんだよ。
弁当出されてもね、誰も勧めちゃあくんなくて。みんなパクついて

るのに、弁当に手を伸ばせる雰囲気じゃないんだ。
だからひとりで練習せざるを得ない訳で。
壁にギターのヘッド押し付けて音出しながら、みんなに背を向けてひとり黙々と…。
もちろんイソ公も知らん顔してるんだけど、耳だけはこっちに向いてたんだね。
「そこ、違うじゃネーか！」って。
それだけ言ってまた3人で騒ぎ始めてさ。
　そのうちにまあ大丈夫かなって判断したんだろう。
次のステージで何曲か演った後、おもむろにポケットから真っ白い紙切れ出してね。
なんにも書いちゃいないのに読むふりして、
「えーっと、さっきリクエスト貰ったんですけど。この曲暫くやってないなあ、みんな覚えてるか？チョット心配だけど、演ってみるか。リクエストだから…」
って、その曲に入るんだ。
こっちはすごく不安なんだけど、そう言って曲紹介されりゃァ気が楽になるってもんだ。
何とかクリアしてね。それでやっとみんな口を聞いてくれるの。弁当にもありつける。
辛かったなァ。まあ、練習してこないヤツが悪いんでね。
いつも私がそうだったんじゃないんですよ。
ある時は石田だったし、天野だったり…
そん時ァ、私が無視する側に回ってたんだ。念のため…。

　いまでもそうらしいけど、練習しなくって出来ないヤツは相手にしないんだね、イソ公は。
間違った練習してたり、懸命にやってるのに出来ないプレイには丁寧に教えてくれる。
教えてくれて「はい、後はあんたの努力で上手くなりなよ」って感じだったな。

　確かにバンドってのは補欠が控えてる訳じゃないんでさ、多くの場

合。
各自がきちんと自分のパートをこなさなきゃ、誰も代役はいないんだから。
そこが辛いところなのかもしれないな、自分だけ「出来ません」ってのが許されないし自分のレベルで満足してられないから。
だからこそ面白いのかもしれない。

今、イソ公を除く天野も石田も、そして私もバンドから離れてるけど、いい時を過ごしたんだなって思いますね。
今だからそう思えるのかも知れないけど…。

その２１　～いよいよ東京進出～

昭和５０年４月。めでたく２年生に進級して授業が始まった。
所属するビーナスプロのスタジオが使えるんで、空き状況を確認して新大久保まで片道２時間掛けてよく通った。
授業よりスタジオの方が優先だったな、間違いなく。
前号の練習風景よりも条件は格段に良くなった。

確か４月２５日だったと思うんだけど、東京新宿の紀伊国屋ビル屋上のニュートーキョービヤガーデンに出演した。
６時半から３０分ステージを３回。
この時、ボーカルアンプを買ってね。土浦の時は事務所の古いヤツを借りてたんだけど、ＴＥＲＲＹＳで自前のものを持ちたいってことになって。
エーストーンの１６万円だった。事務所で立て替えてもらって、毎月ひとり１万づつ返済した。
あれえ、ってことはあのアンプ、２５％は私に所有権があった訳だ。
最後はどうなっちゃったんだろう…。こうゆう事ははっきりさせないとな、イソ公を問い詰めよう。

当時使ってた楽器はイソ公がモズライト、サブギターにエルクカスタムモデル（プラチナゴールデンショーで寺内タケシが１回だけ弾いてたってのがヤツの自慢でね）
アンプはエルクバイキング１００Ｗ。エフェクターはビックマフ、バニーキャット、テープエコーがローランドＲＥ２０１だったかな。
石田はフェルナンデスのバーニーベースＪＢとエルクバイキングＢアンプ。
天野はパールのドラムで高校の時から使ってたからたぶん安物。
私は相変わらずギャバンの黒いレスポールとヤマハソリッドステート３０Ｗ。
イソ公以外はたいした楽器は使ってなかった。
新庄さんから１万円で買ったテスコのチェックメイト４５はヒュー

ズが飛んで使えなかった。　そんなこたァどうでもいい。
ＰＡなんかなかった。昔の話だなあ。

新宿の紀伊国屋書店前って言えば当時はデートの待ち合わせ場所のナンバーワンで。
渋谷ならハチ公前。新宿なら紀伊国屋って、お決まりのパターンで。
今は新宿アルタだってね。時代と共に流行は変わるんだけど、やっぱ紀伊国屋書店前ってのが、なんか知的でかっこよかった時代だったんだね。

それはさておき、このビヤガーデン出演はＴＥＲＲＹＳにとっては初の都心のステージで、緊張もしたしすごく嬉しかったのを覚えてる。もちろん「アイリーンとテリーズ」だったけど。
今回はさらにゴーゴーガールのきゃわいいおネーちゃんが一緒だった。名前は忘れた。
今でいうならイエローキャブのＧカップだな。
イソ公が控室でしょっちゅうオッパイ突っついてたっけ。当時からスケベ、コイツ。
「イヤーン、やめてよォ。エッチィ…キャハ」っておネーちゃんもまんざらでもない様子でさ。
その都度アイリーンが怒ってね。
「いい加減にしなさいよ！イソ君！！社長に言っちゃうからね！」
こっちはひいき目に見てもせいぜいＢカップで、ブサイクだから触る気も起きねえって。ヤダねー女の嫉妬って。
わたくし、かっつうは清純派。そんな下品なことはしない。
けど、１回だけアイリーンのお尻触った、私。
彼女が私の方に尻突き出して「あたしのタンバリン、どこ仕舞ったっけ？」って段ボール箱に頭突っ込んでるもんでさ、つい、ムラムラと…。
サッっと振り返り私を睨んだ。
（やっべえ…）
「うふ、かっつうのエッチィ…キャハ」
「……（ブルッ）」

悪寒が体中を突き抜けたっけ…。

でもって、初日の最初のステージ。

鈴木って店長が挨拶に立って、なにやら長々としゃべって。

「…では、『アイリーンとテリーズ』のステージをお楽しみください。先ずはこの曲から『太陽にほえろのテーマ』張り切ってまいりましょー！」

「ええっ！！？…」

ウチのレパートリーにゃあねーよ、演ったことないじゃんか。

一瞬、血の気が引いたな、…どうするよ…

とっさにイソ公が「マイナーだ」って合図して「ワン、ツー、せえのお！」でＡｍから入って…。

前号の練習風景で書き忘れたけど自分の部屋に居る時は必ずラジオかけててね、ヒット曲は常に覚えるようにしてた。テレビは持ってない貧乏学生だ。

イントロから口ずさめるようになるまでにして、コードを探して弾けるようにって、いつも心掛けてた。

「ＴＥＲＲＹＳだったらこんな感じで演れるな」ってイメージしながら。

これは結構役に立った。コード進行のパターンも分かってくるし、耳も肥えてくる。

太陽にほえろもこのおかげで何とかこなせた。

とにかく口ずさめる曲はなんでも演っちまおうってのがＴＥＲＲＹＳで。

ビヤガーデンやスナックはリクエストが多いんでね、「出来ません、知りません」って言うのは恥だって思ってた。

ある程度のコード進行パターンはみんなで覚えたんじゃなくて、それぞれで覚えてきて。

だからマイナーはＡｍから、メジャーはＣからって決まってた。

不意のリクエストでも「ああ、Ａｍだな」って演ってたの。

もっとも、当時の曲は今よりずっとコード進行は単純だったけどね。

寺内会長が言うところの「今の無国籍な曲」っていうのかな、複雑

だなーって思いますね、昔と比べて。

後で店長に聞いたら「だって何でも演れるって言ったじゃないの。えっ、演ったことなかったの『太陽にほえろ』。うそだあ、チャンと演ってたじゃないか。…ホントに？」

まっ、この程度はお茶の子歳々。へへんだ！　「どっからでもかかってきやがれっ」って気になってたな、自信満々の１９歳（公称２４歳）のイソ公とＴＥＲＲＹＳは…。

その２２　～みやこの西北わっせだーの杜にィ…

楽器盗難事件～

昭和５０年の新宿紀伊国屋ビル屋上のニュートーキョービヤガーデンでのお話の続編。

今回は特別、二題一挙掲載。

第一話

今は知らないが昔っから東京六大学野球の早慶戦の後、それぞれの応援団は神宮から夜の街へ繰り出した。

早稲田は新宿、慶応は銀座って決まってたらしい。

春のリーグ戦だから５月下旬だと思うが、このビヤガーデンを早稲田の学生が借切って。

前日に店長から「都の西北」の楽譜を渡されて、明日までに覚えて来いってね。

その日は朝からどんより曇り空。我々がセッティングを始めた夕方にはついに降りだした。

「へっ、やりい！今日は中止だぜ、ラッキー」

８万円のギャラは月契約だから、中止になっても減る事はない。サッ、帰ろうぜ。

しかし現実はそんなに甘くはない。なにィ？雨天決行だとォ？。学生にとっては年に２回のお祭りだ。飲んで騒げりゃ雨なんか関係ないんだコイツ等。そりゃワカル…。って納得しちゃあいられねえよ、こっちゃあ。

鈴木店長に直談判。

「無理ですよ、楽器がいかれちまう…」

「いいだろ。アンプにシートかぶせて、君らはカッパ着て演ってくれ」

「ギターが濡れちゃうでしょ！」

「お客がキャンセルしない以上、演るったら演る！」

「感電して死んじまうよ。エレキってそうゆうもんなんだからあ」

「そうだよ、死んじゃうよ、テープ流しゃいいじゃん。なあ」

５人の必死の訴えも虚しく、結局演奏するハメになっちまった。

「な、どうせ早めに切り上げるからさ、コイツ等。頼むよ。死なない

だろ、大丈夫だよな。事務所には良く言っとくからさ、『君たちはよく演った』って…」

どうやって演奏したかってね、アンプやドラム、足元のエフェクターはビニール被せて。

早稲田のたぶん1年生だろうけど我々の後ろにひとりづつ付いて傘さしかけて…

何を演ってても聞いちゃいねえ、コイツ等。

雨ん中大騒ぎで。　優勝した訳じゃねーんだよ、コン時。たしか4位だったな、慶応に負けて。6位、もといビリはもちろん東大だったと思うけど。

ところがだ。「都の西北」演るとすげー盛り上がりで。

それまで演奏も聴かず、勝手にワイワイやってたのに一斉に大合唱し始める。

私の後ろで傘さしてた1年生もでっけえ声でがなり出してさ。

「おもしれーな、ずっとコレ演ったるか」ってイソ公が言って、10回位演ったな。

「やい早稲田の1年坊。しっかり傘させ！濡れるじゃねーか！」

ドラムの天野に付いた学生なんか、シンバルの代わりに手首を目いっぱい叩かれてさ。どうも骨折したらしい。　下手だねえ、天野。

第二話

ある日の事。

いつもどおり、ビルの収納庫から楽器を出そうとしたら…ない。

私のギャバンのレスポールと石田のフェルナンデスのジャズベーが、ない。

イソ公のモズライトはある。がケースは開いてあった。

「やっべえ！盗られた！　どうするよ、イソ公」

「ん～。なんでモズライトだけ盗られてねーんだ？コレ19万もすんだぜ。オメー等のはどっちも5万じゃねーか。ケースは開けてある。んー、こりゃ価値のわかんねえヤツの仕業だな。犯人はギターの下手な素人だ…」

「バカ！そんな推理はどうでもいいんだ。今日のステージどうするよ」

「…なんでモズライト持ってかなかったんだ？これって喜んでいいんだか悪いんだか…ああっ、俺も盗られた！エコーチェンバーがねえ！クッソオ」
「だからあ、どうすんだよ、今日…」

事務所にイソ公が電話して。
「…という訳で、ギター買わなきゃ間に合わないんですけど、持ち合わせもないし。ギャラの前借り、いいですかあ？」
「そりゃ困った。ああ、バンスね。いいよ」
「はあ？バンスって？」
「前借のことだ。新大久保のミクニ楽器。連絡しとくから今すぐ行けば間に合うだろ」
初めて覚えた業界用語が「前借り＝バンス」ってのがなんとも情けない。語源は知らない。
慌てて新大久保のミクニ楽器まで行って。
石田はグレコのリッケンバッカー４００１モデル、私はグレコのＳＧを買った。どっちも７万円位だったな。イソ公は盗まれたのと同じローランドのテープエコーだ。
私がその３年後に就職した時の初任給が込込で８万３千円だったから、７万円ってのは結構高価だった。今なら１７万位だろうな。どっちにしても１ヶ月分のギャラがほぼパーになった訳で。何のために演ってたんだろ…。
急いで新宿に戻って、ギリギリセーフ。
何事も無かった様に「テリーのテーマ」を始めるＴＥＲＲＹＳでありました。

それでもって、次回は８月からの宇都宮のビヤガーデンのお話…。かな？
最近モヤモヤしてんだ、私。
当時を思い出すとつじつまが合わないってえのか、みんなの証言も食い違ってて、どうもおかしいんだな、腑に落ちないことがいろいろと。
なあ、イソ公……

その２３　～発覚！　イソ公、ピンはね疑惑。時効寸前？～

　忘却とは忘れ去る事なり…
当時の事はだんだん忘れちゃってね。
あんなだったなァとか、こんな事もあったなァとかってもう３０年も前の事で。
私も一応コレ書くのに取材ってのをするんだ。と言っても取材先はイソ公と石田と天野の３人だけだけどね。
こいつらの記憶がまたいい加減で。元々あんまり頭は良くない４人組だから。

　新宿のビヤガーデンで大事な事忘れてた。
当時のブルージーンズのベーシスト、新庄ハジメさんが来てくれましてね。
出演が決まった頃に話をしたんだけど、忘れずに来てくれて。
感激したな４人とも。演奏もいつに無く緊張したのを覚えてる。
ベースの石田なんか１番緊張しちゃって、
「どうしよう。俺、新庄さんの前でなんか弾けねーよ、おいかっつう、今日だけ代わってくれよ。ベース演れよ、かっつう…」
「ばーか」
髪の長いカノジョがまたスッゲ～美人だった。今で言うならスーパーモデルってえの？
日本人離れした目鼻立ち。ボイン、キュッ、ボイン…デヘェ～。
一方ＴＥＲＲＹＳはってぇと、外国人離れした土着の大和人種そのもので。

「新庄さん、どうだったですか、僕らの演奏…」
「うん。まあまあだな、アマチュアとしちゃあいいんじゃないの？」
「ブッ。あのね、プロなんだけど僕等…ギャラだってひとり８万も貰ってんだから」
「あはは、８万か。俺２３万だ。ま、そんなもんだな、お前らは」
「へっ、新庄さん２３万も貰ってんの、寺内企画から？　すっげえ！」

「大企業の部長クラスってとっかなァ～。あっ、コレ誰にも言うなよ。絶対内緒だぞ」
楽しい時代ではありました。

話は変って先日、石田から電話がありましてね。
「俺、思い出したんだけどさあ、あの頃イソ公が俺のサブベースを『チョット貸してくれ』って持ってったきり返してもらってねーんだよ」
イソ公に問いただした。
「ん～知らねーなあ、そんなこと。あいつの記憶なんかあてになんねーぜ、大病の後だからな。大体さ、かっつうだっていい加減じゃねーか、ギャラ８万って。もっと貰ってたぜ、俺らビーナスプロじゃ破格待遇だってアイリーンも言ってたもん」
「えっ、そんなことねーよ。８万だ。間違いない」
「違うって。確か１２万だ、絶対」
あんまりイソ公が自信ありげに断言するもんで、みんなに聞いて廻ったが天野も石田も８万だったと言う。
「間違いなく８万だ。確か最初は９万って聞いてたけどな。何故か８万になっちまったけど、あの頃は８万でもびっくりしたよなァ、清水のビヤガーデンは１ステージ３００円。１ヶ月演って２万５千円だったもんな…」
「ええっ？、天野。最初は９万って言ってたっけ？」
「ああ、間違いないぜ。ビーナスプロの社長が９万出すって言ってた。その後８万になったんだ」
「ん～…？？？」
イソ公は１２万だって言ってる。俺等は９万から８万に減額された…ん？まてよ、私等３人から１万づつピンはねしてイソ公に上乗せすりゃァ、えーっと丁度１２万だ。つじつまは合う。
先日、石田と天野に電話しましてね。
「…こういう訳だ。おかしいと思うだろ」
「ああ、アンチクショウ、ひでェヤツだ。騙しやがって」
「１万もピンはねしてやがったのか！！イソ公ならやりかねんな。間違いないぜ」
何気なくイソ公に聞いた。

「なあ、あの頃ってさ、ギャラはみんな一緒だったよなあ」
「ああ、俺が１番貰ったっておかしかねーんだけどよ。まあ、オメー等もそれなりに頑張ってたからな。ギャラはチャンと４等分してたじゃん」
「いや、イソ公が１番貰ったっていいんだけどな、リーダーだからさ。４等分しなくたってよかったんだよ」
「何言ってんだよ。俺ァそんなこたァしてねえ。まだ学生だったしな。チャンと分けたぜ、１２万づつ…へ？…あれえ？？？…あっ！…」
「やい、イソ公。あの頃は同額だって散々恩に着せやがって、ホントはピンはねしてたんだろうが、この野郎！正直に言ってみろ！」
「チョット待て……う～ん」
「何とか言えよ、黙秘権か？」
「うるせー！なんだ今頃になって！！社長が俺は別格だって言って１２万くれたんだ。オメー等とは違うんだ、バーカ。ロクに弾けなかったクセに、文句あっか？？」
「何ォ？？、テメー３０年も騙してやがったのか！」
「黙れ！俺のおかげでＴＥＲＲＹＳ演ってたじゃねーか。下手くそなかっつうのギターなんかに誰が１２万も出すんだ。よく考えてみろ」
「るっせぇ！！今のテリーズしか知らない人はわかんねーだろうけどさ、当時のＴＥＲＲＹＳはな、悔しいけどイソ公のギターテクと、かっつうのアイドル的ルックスでもってたんだ。タイガースにジュリー、テンプターズにショーケン、ワイルドワンズにゃあチャッピーでな。…でウチはかっつうよ。いい勝負してたんだ！」
「オメー、頭ダイジョーブかあ？」
「まあ異論もあるだろうけどさ。この辺で手を打とうぜ、イソ公よ。石田も天野も所詮はカレーライスの隅っこにのってる福神漬けとラッキョみたいなもんでさ。な、俺からピンはねした分だけでいいから、返してくれよ。福神漬けとラッキョには上手く言っとくからさ、オメーは悪くないって。俺の分だけ、なっ、…」

　さて、イソ公がこの司法取引に乗ってくるか否か…。
まあ、君の弁明の機会だけは与えてやる事にしよう。
なんとか言ってみやがれ！

緊急臨時増刊　『ホームページ一時閉鎖の真実』～

「おいイソ公、オメーんとこのホムペ、つながんね～じゃんか。どーなってんだよ！」
「おう、かっつうか。も、やめたから、アレ」
「なにィ、やめたァ？？　何でだよ、何でやめんだよ！！」
「うっるせーな。俺ァな、オメーらの遊び場提供してんじゃねーんだよ。あんなもんやったってカネにゃァならねーんだ。俺ァ道楽で商売やってんじゃねーの」
「俺らの遊び場だあ？　バカヤロー！テメー本気で言ってんのか？」
「な、かっつうよ、オメーはサラリーマンだからわかんねーだろうけどな、カネになんねーこたァやってらんねーの。俺さ、今、近鉄球団の社長の気持ち、良くわかるんだな」
…こいつァ時々経営者になりやがる。

「俺ァテケテケもいいじゃァないのもビタ1文貰っちゃあいねーぜ。なあ、イソ公よ。いいか、たった半年で1万件のアクセスがあったんだぜ。スゲー事だぜ、わかるか？　みんな文化屋のお客だぜ。いいのか？」
「たかが客が！ホムペ見たってしょうがねーの、店に来てくれりゃァ50円のピック1枚だって買ってくれるじゃんか」
「イソ公！テメーって奴ァ、どうしょーもねー奴だ。30年前とまったく変わってねーな。いや、もっと悪くなってやがらァ」
「無礼なっ！！　ほら、かっつうも近鉄ファンとおんなじじゃんか。やめるとなったら急に『ファンを無視するな』ってよ」

そういやァこいつのワガママ日記でプロ野球の事書いてたな。
「ファンにも義務がある」って。
だから私は反論した。
「そんなもんねー」って
こいつァナベツネと一緒だな。やっぱ。
うん、言ってた、「俺、ナベツネ好きだな」って。

ピースケに電話したの、私。
「突然さ、『もう、やめるから』って言われてさオメーら遊ばしちゃあいられねーって。だからカットしちゃったけどさ…」
うん、イソ公の言ってることとおんなじだ。
これが１０月２日土曜の夕方の事。

その夜はだーれも読んでもらえない「いいじゃァないの…」を空しく書いた私。
まったく、会社で書いてる私の企画書と一緒だね。誰も読んじゃくれないって…。

３日の午後、もう１度文化屋に電話した。
出たのはリペア名人の落人川崎氏。
「ああ、かっつう？　今日は朝から電話鳴りっぱなしでさ、ホームページどうしたのって」
「で、イソ公はなんて言ってるの？」
「うん、『いやあ、ちょっとお休みしてるだけでね、そのうち再開するからさ。待っててね、えへへ…』って」
ったく、こいつァ強気なのか弱気なのか？？？？…

ところが４日の月曜日。帰宅したら復活してるじゃないの、文化屋ホームページ。
ピースケもコメント入れてる。　ところがイソ公は知らない。

おお、ピースケ！やるじゃんか。
俺も「テケテケ伝」続けるぜ、「いいじゃァないの…」もな、カネになんねー事に頑張るっていいじゃんなあ。
ありがとよ、ピースケ…。

それに引き換え、どうなのよ、オオバカイソ公！！
決意しましたよ、私。こんな奴に文化屋ホームページは任しちゃられネエって。

コホン！　不肖、わたくしかっつうは、文化屋ファンの組合を創設し、僭越ながら古田敦也となってこんなナベツネもどきの独裁者『イソ公』と断固戦います！

つきましては１２０万人の署名を集めなきゃならんのですが、とても廻ってらんないのでね。
で、私に同意される方は、当ホームページの「ＢＢＳ」にカキコをお願いします。
「ギターの杜」存続の危機なのです。
表紙の左側の「ＢＢＳ」をクリックすりゃァカキコめますんで…。
「ピースケ頑張れ」でも「かっつう素敵」でも「イソ公死ね」でも「ピースケファイト」でも「かっつう大好き」でも「イソ公どアホ」でも「かっつう愛してる」でも「かっつうカッコいい」でも「かっつう結婚して」でもなんでもいいから…ん？

ピースケ、君はしっかり勉強してなさい。
ここは私がしっかり守っとくから。
皆様のご支援を、ヨロシクおねがいしま～す！！